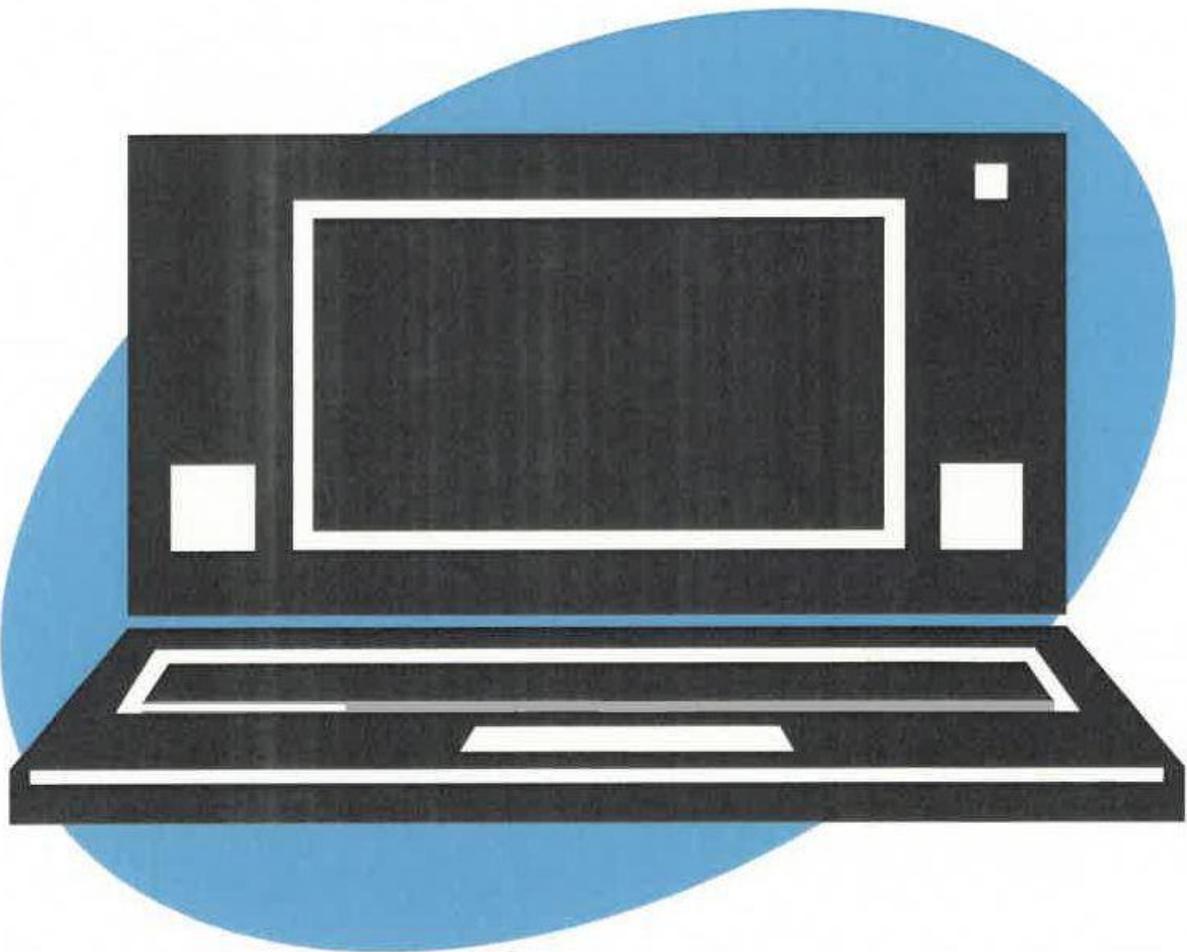


令和4年度 研究紀要「考える目」

児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした

視聴覚・情報教育はどうあるべきか

—新しい教育メディアを利用した視聴覚・情報教育の実践—



相模原市立小中学校視聴覚教育研究会

目 次

はじめに 相模原市立小中学校視聴覚教育研究会 会長 田巻 直人

I 研究概要

- 1. 研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 2. 主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2～
- 3. 研究の重点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 4. 研究組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 5. 研究経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4～
- 6. 研究の全体構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

II 研究内容

1. 研究部の実践

- (1) メディアリテラシー教育研究部・・・・・・・・ 7～
- (2) ICT活用研究部
 - ①Google workspace班・・・・・・・・・・・・・・ 10～
 - ②アプリ研究班・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18～
 - ③プログラミング教育研究班・・・・・・・・・・・・ 25～
- (3) 番組活用研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32～
- (4) 中学校研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36～

2. 事業部の実践

- (1) 放送コンテスト・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39～
- (2) 広報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
- (3) ホームページ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

III 今後の課題

- 今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

あとがき 相模原市立小中学校視聴覚教育研究会 副会長 浅倉 勲

はじめに



相模原市立小中学校視聴覚教育研究会
会長 田 巻 直 人

令和4年度も本研究会へのご理解ご協力をいただきありがとうございました。新型コロナウイルス感染症が収束しない中ではありましたが、集合して対面での研究を進めることができました。また研究授業についても実施することができました。市内小中学校の校長先生方や教育関係機関の先生方、多くのご支援があつてのことと感謝申し上げます。

さて、本研究会は研究テーマを「児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした、視聴覚・情報教育はどうあるべきか ～新しい教育メディアを利用した視聴覚・情報教育の実践～」として、研究を進めてきました。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴いGIGAスクール構想の前倒しで進められた一人一台端末(クロームブック)の導入は、教育現場での混乱をもたらしたと同時に新たな授業の可能性を予感させるものとなりました。

本研究会では専門的知識をもった先生だけが使えるのではなく、だれでも取り組むことができることをめざし「ICT活用研究部(Google Workspace 班・アプリ研究班(ミライシート等)・プログラミング班)」「メディアリテラシー教育研究部」「番組活用研究部」「中学校研究部」の4つの研究部で取り組みを進めてきました。それぞれの部会では、授業でのICT機器のより効果的な活用を研究するとともに、活用の主体者である児童・生徒の情報セキュリティモラルや授業の中でのプログラミング教育の必然性などについても研究を通して探ってきました。本研究会で実践・研究したことが、市内小中学校の教育活動における一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本研究会への研究推進にあたり、相模原市教育委員会、小・中学校長会をはじめ、多くの関係諸機関の皆様にご指導ご協力いただきましたことを心より感謝申し上げます。

I 研究概要

1. 研究主題

児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした、
視聴覚・情報教育はどうあるべきか
—新しい教育メディアを利用した視聴覚・情報教育の実践—

2. 主題設定の理由

現代のネットワーク社会において、コンピュータやスマートフォンといった情報端末が生活の中でもなくてはならない存在になっており、同時に子どもたちの日常生活にも大きな影響を与えている。昨年、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、GIGAスクール構想を前倒しにする形で、小中学校に一人一台端末（クロームブック）が導入された。個々の情報端末を通して世界中がインターネットで結ばれ、いつでもどこでも世界各地の情報をリアルタイムで収集することができるだけでなく、自らの情報を世界中に発信することもできる双方向の情報伝達が可能になり、日常的なコミュニケーションツールにもなっている。

便利で手軽に利用できるという反面、その情報の一つ一つが持つ意味について正確に理解し、多くの情報の中から必要な情報を判断し選択・活用するという情報活用能力が求められている。子どもたちが十分に理解しないまま使うことで、溢れる情報に振り回され、犯罪に巻き込まれたり、意図せずに加害者となったりする危険性も存在する。

このような現実をふまえ、これからの教育では、広い視野と社会性を持ち、主体的・創造的に生きていくことができる心豊かな人間を育てていくことが求められる。そのためには一人ひとりの子どもたちが自分のよさや可能性を発揮して、自分の課題をもち、進んで考え、より良い判断をしながら課題を解決し、夢を表現し、創造できるような資質や能力を育成していくことが大切である。

昨年度から全面実施となった小学校学習指導要領、また今年度から全面実施となった中学校学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力として、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等が位置付けられた。

視聴覚教育を研究する者として、視聴覚機器や教材を通して子どもの学習意欲を引き出し、学力向上につながる視聴覚メディアを活用した学習活動を推進することがこの研究会としての大きな責務であると考えられる。一人一台端末が導入された現在、学習の中で、子どもたちが情報の受け手となる活動だけでなく、その情報の使い手あるいは作り手となって主体的な学習活動ができるように、教師が正確な知識を持って支援をすることへの重要度が増してきている。子どもたちが、自らの課題に対して各種メディアを効果的に活用し、情報を主体的に収集・整理し、蓄積された自分の知識としてそれら正しい方法で表現・発信していくという「情報活用の実践力」を育てていくことが重要である。このように一人ひとりの子どもたちが主体的に調べ、学ぶ方法を身につけるといふ「自ら学ぶ力」を育てること、さらに情報社会を生きていく上で必要不可欠となるモラル面や安全面等、これからの社会生活において必要な知識や態度の育成が、視聴覚・情報教育の果たす大きな役割と言える。

学校生活の中にもネットワーク上のコミュニケーションが増えてきており、情報モラル教育の重要性が増していくため、情報モラル「相模原プラン」を視聴覚・情報教育主任が中心となり、各学校で実践を積み重ね、課題を明らかにしながら、情報モラル教育の広がりが生まれるよう積極的に研究を深めていく必要がある。

昨年度、児童生徒一人一台端末と、高速大容量の通信ネットワークが整備され、各学校がそれぞれ実践を積み重ねてきている。「教育の情報化」が進む中で、視聴覚・情報教育は一つの教育分野としてだけでなく、授業作りの土台にかかわる存在になりつつある。視聴覚・情報教育の今日的な役割を見据えながら、研究を進めていく。

本研究会は、「児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした視聴覚・情報教育はどうあるべきか」を今年度も基本テーマとし、具現化の観点として、次の3点を課題として取り組んでいきたい。

① 意欲と能力を育てる視聴覚・情報教育

子どもたち自らが「学ぶ意欲」を持ち、学習に対して「主体的に対応できる能力」を育成するための視聴覚・情報教育のあり方を探る。

② 基礎基本の定着と個性を育てる視聴覚・情報教育

一人ひとりの個性を生かすために、視聴覚教育メディアを生かした基礎基本の定着と個性を伸ばす視聴覚・情報教育のあり方を探る。

③ 豊かな感性と社会性を育てる視聴覚・情報教育

子ども達の心情に訴え感動をもたらす視聴覚教育メディアを活用し、豊かな心と感じる心を持った児童・生徒育成への方策を探る。

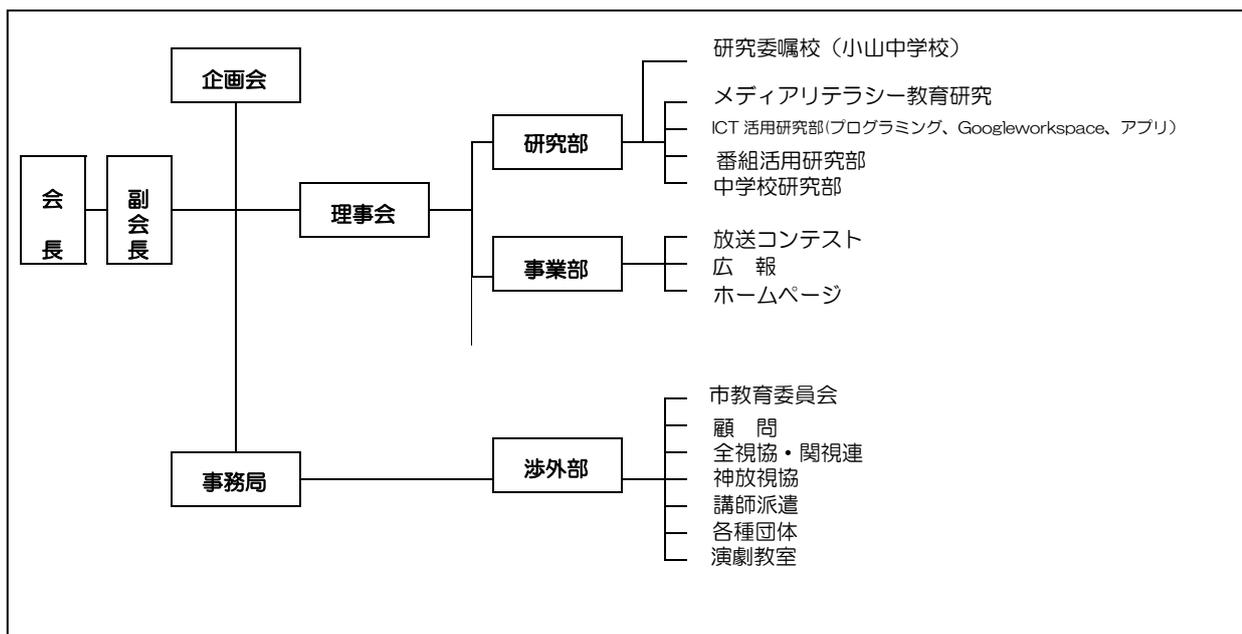
3. 研究の重点

本年度は、昨年度導入された一人一台端末（クロームブック）の活用に重点を置いて、ICT活用研究部を再編して取り組んでいく。ICT活用研究部を3つの班、プログラミング教育班、G-suite班、アプリ班（ミライシード等）に分け、クロームブックの効果的な活用について研究していく。

同時に、メディアリテラシー教育研究部では、情報モラル教育の充実を重点として取り組んでいく。番組活用研究部では、一人一台端末を使った番組活用について研究を推進していくこととなった。

また、Google classroomを使った理事同士の情報交換にも積極的に行い、各校の実践例などを共有しながら、学校間格差が少なくなるように取り組んでいく。そして、子どもの実態に応じた効果的なICT活用を通して、確かな学力を育む研究をさらに深めていく。

4. 研究会組織



5. 研究経過

<総会>

- 6月2日 各学校に資料を送付しGoogle formsを使い実施
- ・令和3年度事業報告・決算の承認
 - ・令和4年度役員、事業計画及び予算の承認

<企画会>

- 6月23日 上鶴間小学校
- ・令和4年度相視研運営について
 - ・夏季特別研修会相模原大会運営について
- 7月28日 中央中学校
- ・令和4年度相視研運営について
 - ・各研究部所属メンバーについて
 - ・研究日程確認
 - ・夏季特別研修会相模原大会ホームページ開催作業
- 9月16日 二本松小学校
- ・各研究部の活動報告（研究授業者、授業日、内容）
 - ・小学校放送コンテストの内容確認
- 10月18日 上鶴間小学校
- ・令和5年度神奈川県学校放送視聴覚教育研究協議会研究大会相模原大会準備委員会
- 1月23日 二本松小学校
- ・各研究部の活動報告（研究授業の報告など）
 - ・理事会にむけての確認
- 2月15日 上鶴間小学校
- ・令和5年度相視研研究の方向性について
- 3月10日 二本松小学校
- ・令和4年度研究のまとめ
 - ・令和5年度研究の方向性について

<理事会>

- 7月28日 中央中学校
- ・研究所属決定
 - ・令和4年度年間計画について
 - ・各研究発表大会について
 - ・小・中学校放送コンテストについて
- 9月16日 二本松小学校
- ・年間計画の確認と研究組織確立
 - ・研究部研究推進（研究授業について）
 - ・各研究発表大会について
 - ・小・中学校放送コンテストについて

10月18日 上鶴間小学校

- ・研究部研究推進（研究授業について）
- ・各研究発表大会について
- ・小・中学校放送コンテストについて

1月23日 二本松小学校

- ・研究部研究推進（研究のまとめについて）
- ・小・中学校放送コンテストについて

3月10日 二本松小学校

- ・小学校放送コンテスト審査結果発表
- ・入賞作品視聴
- ・研究部研究のまとめ

<研究発表関係>

8月3日～9月30日

- ・令和4年度 神奈川県学校放送視聴覚教育合同夏季特別研修会
相模原大会（相視研ホームページ開催）

12月8日

- ・令和4年度関東甲信越放送・視聴覚教育研究大会栃木大会

<小学校放送コンテスト>

11月 コンテスト実施要項配付
11月 FMさがみ 審査依頼
11月 参加校調査・作品募集
2月 FMさがみにて 審査会
3月 表彰

<神奈川県中学校放送コンテスト>

9月 募集開始
10月 地区予選
11月 決勝大会・表彰

<広報活動>

3月 令和4年度研究紀要「考える目」発行
随時 相視研ホームページ更新

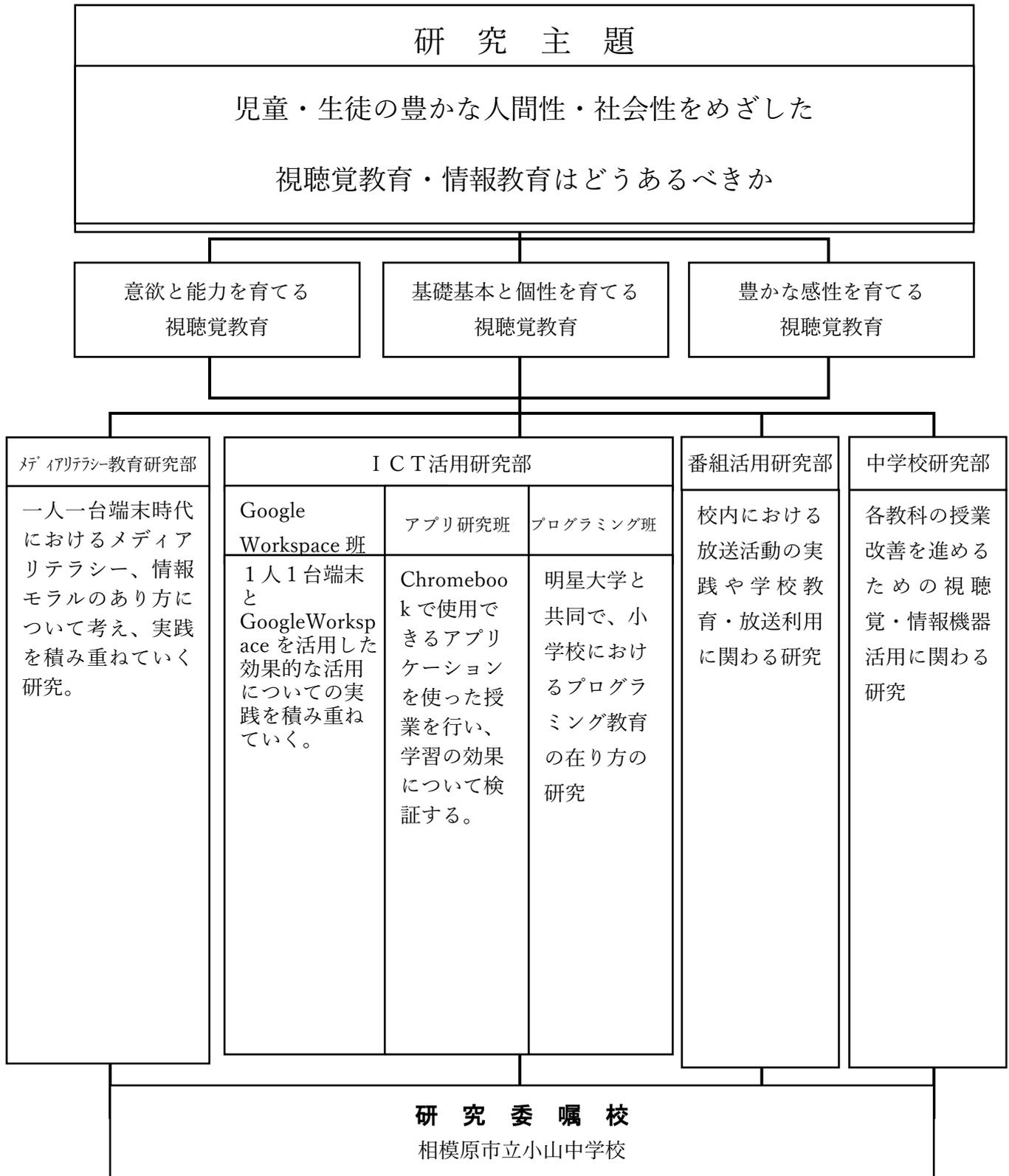
<神放視協 他>

【神放視協】理事会・事務局会は書面開催

8月3日～9月30日 【神放視協】「夏季特別研修会相模原大会」
相視研ホームページ

12月8日 【開放協 関視連】研究大会栃木大会

6. 研究の全体構造



Ⅱ 研究内容

1. 研究部の実践

(1)メディアリテラシー教育研究部

1. 研究主題

「コンピュータ1人1台時代の善き使い手を目指す情報活用能力の育成」

2. 主題設定の理由

情報技術の急激な進展により、子どもたちが情報を活用したり、発信したりする機会が増大している。今後も情報技術は飛躍的に進展し、人々のあらゆる活動において、機器やサービス、情報を適切に選択・活用していくことが必要不可欠な時代である。

学習指導要領が改訂され、情報活用能力(情報モラル教育も含む)を学習の基盤となる資質・能力として定められたのには記憶に新しい。また、新型コロナウイルス蔓延の影響から GIGA スクール構想の前倒しにより、一人一台の Chromebook の整備も完了した今、機器を活用し、より良い学びを実現するためには児童・生徒にメディアリテラシーを身につけさせることが急務である。これまで求められてきた情報モラル教育を見直し、使用する児童生徒が善き使い手になるために、トラブルを未然に防ぐために制限をかけるなどの指導ではなく、使用する者の視点から、どのようなことに気をつけながら使用していけば上手に使っていくことができるのかを一緒に考える「デジタル・シティズンシップ」の視点が必要だと考える。

今年度も昨年度に引き続き、情報モラル教育の見直しを進めていきながら、情報活用能力の育成について研究をしていきたい。そして、学校だけでなく、家庭や今後の生活にも生かせる力の育成を目指していく。

3. 研究方法及び内容

『情報活用能力の育成』を主題に、情報収集や実践などを行い、以下の研究を進めていく。

また、今年度は、情報モラルハンドブック改訂班とデジタル・シティズンシップを中心とした実践班に分かれて活動する。

① 「情報モラルハンドブック2017」の改訂

「情報モラルハンドブック2017」ができてから、5年が経過する。その間に1人1台端末の整備により、環境は大きく変わった。転換期である今、改めて情報モラル教育についての共通理解を図る。また、これまでを生かすとともに、改善点を洗い出し、どのように実践をしていくかについて考え、教育センター学習情報班と協力しながら、改訂版を発行する。

② 「デジタル・シティズンシップ」を中心とした実践研究

昨年度の研究をベースに、各校での実践や研究授業などを中心に研究を進めていく。

4. 研究経過

	情報モラルハンドブック改訂班	デジタル・シティズンシップ実践班
7月	情報共有・顔合わせ	情報共有・顔合わせ・授業者について
9月	ハンドブック改訂に向けての話し合い&授業案検討	デジタル・シティズンシップについて共通理解
10月	ハンドブック改訂に向けての話し合い&授業案検討	研究授業検討
11月	ハンドブック改訂に向けての話し合い&授業案検討	研究授業検討
12月	ハンドブック改訂に向けての話し合い&授業案検討	研究授業協議
1月	研究のまとめ	
2月	相視研理事会で研究報告をする。	研究のまとめ 相視研理事会で実践研究報告をする。

5. 研究内容

【デジタル・シティズンシップ実践班】

デジタル・シティズンシップ実践班では、「デジタル・シティズンシップ+やってみよう！創ろう！善きデジタル市民への学び」をベースに指導案を作成し、「メディアバランスについて考えよう」というめあてのもと、授業実践を行った。架空の人物の1日のスケジュールを提示し、それを修正する活動を通して児童がメディアとの関わり方について考える、という流れを計画した。実際の授業では、メディアとの関わりを考えるきっかけを作りながら、普段の生活として「友だちとのやりとり」「睡眠時間」など、メディアとの関わり方が変わると、それ以外の部分がどう変わっていくのかという視点から自分の生活を見つめ直す児童が多くいた。修正の段階では、グループで議論を交わすことにより、「運動」「ショッピング」「読書」など、自分たちの趣味や好みを取り入れようとする姿が見られた。

課題①1時間の授業の中で何をねらいとして行うか

デジタル・シティズンシップの考え方と、自分の生活を見つめ直すという2つの内容を同時に取り扱うことは難しかった。時間が足りなくなってしまうたり、児童に知識がないままに学習を進めても、自分のメディアバランスについて深く見つめ直すことができなかつたりするからだ。そのため、デジタル・シティズンシップについての知識を得るための1時間、メディアバランスについて考える1時間と、2つに分けて授業を進め、より学びが深まるようにしていく。

課題②モデルケースの精選

今回児童に提示したモデルケースは、メディアを利用する時間こそ多かったものの、日常生活に大きく支障をきたすような内容ではなかった。児童に危機意識を持たせるためには、もう少し極端な内容にしておく必要があった。

課題③授業形態

今回の授業では、グループ活動を通してスケジュールの修正を行ったが、児童の趣味や好みによって意見が異なるために方向性が定まらず、時間がかかってしまったグループが多くあった。自分のメディアとの関わり方を見つめ直すという目的で授業を行うのであれば、個々でスケジュールの修正を行う必要があった。デジタル機器を活用して個人でスケジュールの修正を行い、それについて共有を行うとよりスムーズに進行が行えるのではないかと。

課題④教員の知識不足

授業後の振り返りの中で、そもそも教師にデジタル・シティズンシップの考え方が身に付いていなければ議論ができない、という意見が挙がった。授業の実践を行う前に、まずは部会のメンバーでデジタル・シティズンシップとはどういったものなのかを把握する時間を作り、授業の実践につなげていきたい。

【情報モラルハンドブック改訂班】

情報モラルハンドブック改訂班では、「情報モラルハンドブック 2017」の発行から数年が経過したことや GIGA スクール構想の推進に伴い、一人一台端末の配付で教育現場を取り巻く ICT 環境が大きく変化したことにより、ハンドブック改訂を進めていかなければいけない現状を向かえ、ハンドブックの改訂作業を進めていくことになった。

時代の変化に伴い、これまでの「情報モラル教育」と「デジタル・シティズンシップ教育」を絡めながら、よりよい情報活用能力の育成を図るための「情報セキュリティ・モラル『相模原』プラン 2023」の作成を相模原市教育センターの指導の下、進める運びとなった。

「情報セキュリティ・モラル『相模原』プラン 2023」は、道徳科で扱う情報モラルの授業を含め、各教科の授業で情報モラルとしての知識を養う「知識を身に付けるカリキュラム」と、デジタル・シティズンシップ教育の視点を盛り込み、各教科で学んだ知識を使って、生活の中でどのように活用していけばいいかを考える「生活に活かすカリキュラム」で構成されている。

授業づくりにおいては、各部員がそれぞれのカリキュラムに分かれて、教科の特性と情報モラルに関する事項を関連させて授業案を練り、指導案の作成を進めた。道徳科での情報モラル教育については、教科書の題材を活用するものである。「知識を身に付けるカリキュラム」については、これまで通り広教（広島県教科用図書販売株式会社）の「事例で学ぶ Netモラル」を活用しての指導案づくりを行った。「生活に活かすカリキュラム」については、教科の学習の中で実際に端末を使用する際、使用するメリットやデメリットを考え、よりよく活用していく、デジタル・シティズンシップの考えを取り入れた指導案づくりを行った。また、市内全体で活用が進められるよう、指導案の他にも、より多くの教員が取り組みやすいようにと、授業に活用できる資料（Google スライドやフォームなど）やワークシートなども作成した。

来年度の 4 月から運用できるように、教育センターと協力をしながら、内容の精選、授業案、資料やワークシートなどの作成・改訂作業を進めた。

6. 来年度に向けて

昨年度から「デジタル・シティズンシップ教育」の考え方について、部会を通して少しずつ広まってきた。今年度は、実践班と改訂班の 2 つに分かれ、より具体的な研究を進められた。一方で、まだ「デジタル・シティズンシップ教育」がどのようなものなのかがわからず、悩みながら活動をしていた部員も少なくなかった。

来年度以降は、市内全体に「デジタル・シティズンシップ教育」とは何かを伝えるための研修や講座を設けるなど、共通理解を図っていくことが必要ではないかと思う。「情報セキュリティ・モラル『相模原』プラン 2023」の中に「デジタル・シティズンシップ」の考え方を盛り込めたことは、今後の市内の発展に寄与できる成果ではないかと思う。

来年度は、改訂された「情報セキュリティ・モラル『相模原』プラン 2023」を活用した授業実践を各校で行って情報交換をするなど、まずは積極的な活用を進めていきたい。実践する中で、課題なども見えてくると思うので、そこから議論を深め、「善き使い手を目指す情報活用能力の育成」を図っていけるよう、さらなる研究を進めていきたい。

(2) ICT活用研究部

①Google workspace 研究班

1. 研究主題

「タブレットPC1人1台の活用環境による主体的な学びの創造」

～Google workspace の効果的な活用法～

2. 主題設定の理由

ICT(情報通信技術)の急速な発展は、グローバル化が進む世界に大きな変革をもたらし、児童の日常生活やライフスタイルにも影響を与えている。この高度情報化社会を生きていく児童にとって、ICTを適切に扱い情報活用能力を身につけていくことはとても重要なことである。

新学習指導要領では、情報活用能力(情報モラルを含む)などの資質や能力を育成できるよう、各教科の特質を生かしつつ、教科等横断的な視点からの教育編成を図ることが求められようとしている。相模原市では、令和2年度にGIGAスクール構想の実現にむけて、小中学生の全児童生徒・全職員にchromebookが配備された。Googleアカウントを活用したGoogle workspaceのアプリケーションが利用可能となり、学習面はもちろん、学校生活全般において、様々な可能性が広がることとなった。そこで、学習面を中心に、学校生活全般においてGoogle workspaceの効果的な活用方法を探り、一人一人の主体的な学びを生み出していくことを本研究班の主題として設定した。

3. 研究方法

本研究班では、各教科等のねらいに迫るため、また、学校生活をより豊かにしていくためのGoogle workspaceの活用法を探るべく、実践を積み重ね、研究を進めていく。授業内での活用法では、教科の特性を押さえながら、主体的な学習を促したり、協働的な学びにつなげたりするために、伝え合う場面「共有」(思いの共有、表現方法の選択)を研究の柱として考えた。研究の初期段階では、ブレインストーミングを実施し、研究部員一人ひとりが研究テーマに迫るための様々な意見を出し合った。さらに、KJ法を活用し、様々な意見を整理・分類しながら意見をまとめ、研究仮説を立てていった。研究仮説を実証するために、研究授業の内容を検討し、実際にGoogle workspaceの活用を取り入れた研究授業を行った。

4. 研究経過

- 7月 研究テーマの確認、研究仮説の設定、研究授業者決定
- 9月 研究授業に向けての情報交換、研究授業内容の検討・決定
- 10月 研究授業の指導案検討
- 12月 研究授業「広田小学校 岩田先生」、研究協議
- 1月 研究のまとめ、来年度の研究について
- 3月 研究紀要完成

5. 研究内容

前年度までの研究では、どのアプリケーションでどんな長所や短所があるのか、どのような実践方法が考えられるのかを研究班として示した。しかし、研究テーマである「主体的な学びの創造」につながった実践例は少なかった。その反省から、今年度の研究では、各校に Google Workspace のアプリケーションを活用した実践を広めると共に研究テーマに迫った活用方法についての研究を進めた。

【研究授業について】 第1学年 生活科「じぶんでできるよ」

研究授業は、広田小学校の岩田廉教諭が Google アプリケーション「Forms」「スライド」を活用して行った。「Forms」は、アンケート機能と集計機能が優れているため、児童の実態調査に適している。単元の前に行うことで、児童の変容を見取ることができると考えた。「スライド」は、考えの共有場面において、写真や動画による実物があることで、話し手・聞き手ともに、内容を具体的にイメージすることができるので、交流が活発になると考えた。

導入では、児童が各家庭で頑張ったことを振り返り、「友だちに伝えたい」という意欲を高めてから本時のめあてを確認した。展開では、スライドを活用した発表資料を使って複数の児童と交流した。交流前には、気づきを得やすくするために、話し手と聞き手のポイントや発表の型を示した。良い交流場面があった時には、中間指導でクラス全体に共有するなど、全体がうまく交流できるよう支援を行った。写真や動画を発表資料に使ったことで、「この部分はどんなことをしているの?」「水やりでお花が喜んでいる。自分もやってみよう。」など、具体的に質問したり感想を伝えたりする場面が見られた。終末では、「自分の役割」「これからしたいこと」「共通点と相違点」の3つの視点を示し、気づきをそれぞれがまとめた。

【活用した Google アプリケーション】 ※前年度の研究より(赤字は活用した長所)

「Forms」【長所】

導入や振り返りの場面で活用でき、アンケート機能としても優れている。理解度を確認したり、学んだことを共有したりすることが短い時間で効果的にできる。

「スライド」【長所】

図や写真、動画などを使った発表資料の作成が可能。共同編集機能を活用することで、グループで1つの課題に取り組んだり、足りない情報をお互いに補ったりすることができる。他者や他グループと共有し、コメント機能を使ってアドバイスをすることでより深い学びにつながる。

6. 成果と課題

○成果

- ・紙媒体(絵)よりも写真や動画での交流がとてもやりやすい。
⇒「読む」「聞く」よりもさらに多くの情報を得られ、発達段階的に取り組みやすかった。
- ・写真や動画を用いることで、「見てほしい」「聞いてほしい」という意欲的な姿が見られた。
- ・家庭での取り組みがイメージしやすく(情報量が多い)、聞き手から質問がやすかった。
- ・「一人一台端末」「持ち帰りが容易」の点から、家庭での取り組みを共有しやすくなった。
⇒今までに比べて、写真や動画を学校に持ってくるハードルが下がった。
- ・話し手本人も気づいていない取り組みの良さを聞き手が気づいて伝えていた。
⇒お互いの取り組みや気づきを深めることにつながっていた。
- ・データを蓄積することで、他の単元や次年度での活用につながる。
⇒「もうすぐ2年生」の生活単元で活用。自分たちの学びの足跡がわかる。

△課題

- ・低学年では、家庭でのサポートが不可欠。取り組めない家庭へのケアが必要、想定して準備。
⇒【例】絵に描く。デジカメを貸与しての家庭での撮影。学校で教員と撮影。
- ・話型は示されていたが、写真や動画それぞれの発表の仕方を示してもよかった。
- ・写真や動画の撮り方に差がでていた。コツを示すために、アップで撮影するなど工夫が必要。
⇒どこを見てほしいのか、どこが工夫なのかを撮影前にしっかり考えておく必要があった。
- ・話す聞く時の姿勢やルールの徹底。中学校区で系統だてて指導する。
- ・情報量の多さから、「話す・聞く」よりも「見る」になっているのではないか。
⇒コミュニケーション能力の育成につながるのか。
⇒「写真や動画を指して説明」「コツカード、話すカード」など更なる手立てが必要。

7. 来年度に向けて

来年度も、各校に Google Workspace のアプリケーションを活用した実践を広めると共に研究テーマである「主体的な学びの創造」に迫った活用方法についての研究を進めたい。主体的な学習を促したり、協働的な学びにつなげたりするために、伝え合う場面「共有」を研究の柱としながらも、発達段階に合わせた活用場面や活用方法を探っていききたい。

○来年度の研究案

- ・「共有」を継続 小学校低学年～高学年、中学校へと活用場面をまとめたい。
- ・「共有」以外での効果的な活用方法。(共有だけで終わらず、考えを広める)
- ・学習者用デジタル教科書の活用方法。
- ・持ち帰りを絡めた学習での活用方法。
- ・実践事例集を作成、配付。(他教職員へ広める)

8. 研究授業について(指導案)

相視研 Google workspace 研究班 生活科学学習指導案

広田小学校

指導者 岩田 廉

- 1 日 時 令和4年12月1日(木)5校時 13:25~14:10
- 2 場 所 第1学年2組教室(校舎1階)
- 3 学年・学級 第1学年2組 24名
- 4 単 元 名 「じぶんでできるよ」(2)
- 5 単元の目標

家庭生活について、調べたり、尋ねたりすることを通して、自分の家庭生活を振り返り、家庭生活を支えている家の人のことや、家の人のよさ、自分でできることなどを見付け、家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活しようとするができるようにする。

6 単元について

(1) 児童観

○生活科について

学校生活においては、給食当番・掃除当番・日直・係活動等で自分ができることを行い、自分の役割を果たそうとする姿が見られる。2学期の個人目標では、「先生に言われる前に動く」のように自分から動くことを目標にする児童や、当番活動・係活動で人数が足りないときや困っている児童がいる時に友達同士で助けようとする児童がいる。道徳の授業で、家庭での手伝いを扱った際には、「家で手伝いをしている」と答えた児童が一定数見られた。一方で、家庭生活について調べたり尋ねたりする経験はなく、互いに支え合って成り立っていることに気付いている児童は少ない。規則正しい生活や健康の面に対して、自覚をもって行動している児童も少ない。

GoogleForms を用いて、家庭生活についてのアンケートを実施した。結果は以下の通りである。

事前にアンケートを実施して実態調査をしたいと考えております。

設問についてご意見いただきたいです。

- ・家でお手伝いをしていますか？
- ・なんのお手伝いをしていますか？
- ・家で自分にできることはありますか？
- ・家族の役に立ちたいですか？ など

○ICT の力について

Chromebook へのログイン・ログアウトができるようになってきている児童が多い。使用しているアプリケーションは、GoogleWorkspace の Classroom、GoogleForms、ミライシードのオクリンク、MIM デジタル等である。半分以上の児童が円滑に操作できる反面、ログイン操作に時間がかかってしまう児童もいる。そのような児童は、友達に教えてもらって操作を進めたり、教員の支援を受けたりして、操作をすることができる。スライドの活用については、本単元が初めてである。

(2) 教材観

○生活科について

本単元は、「学習指導要領第2章第5節生活」の内容(2)「家庭と生活」を扱う。

(2) 家庭生活に関わる活動を通して、家庭における家族のことや自分でできることなどについて考えることができ、家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。

児童にとって家庭は、自分を支え、育ててくれる家族がいるところである。そこでは、家族一人一人が家庭の内外の仕事や役割を果たすとともに、思いやりや愛情によって互いに支え合い、家庭生活が営まれている。家庭生活は児童にとっての生活の基盤であり、心のよりどころである。しかし、児童にとってあまりにも身近であるため、その大切さに思い至らないことが多い。家庭生活と関わる活動を通して、身近さによって気付きにくい、家族のことや自分でできることなどについて考え、家庭での生活は互いに支え合っていることに気付き、自分の役割を果たしたり規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとすることを目的としている。

○ICTの面について

GoogleFormsは、アンケート機能と集計機能が優れているため、児童の実態調査に適している。単元の前後に行うことで、児童の変容を見取ることができると思う。

Googleスライドは、写真を簡単に挿入することができる。また、プレゼン形式で説明する際に、写真を補足資料として活用することができる。考えの共有場面において、写真や動画による実物があることで、話し手・聞き手ともに、内容を具体的にイメージすることができるので、交流が活発になると考える。

(3) 指導観

○生活科について

本単元は、「じぶんのいちにちをみつめよう」「じぶんでできることをしよう」「これからもつづけよう」の3つの部分に分かれている。序盤の自分の生活を見つめる際に、児童が「家でこんなことをしたい」という思いをもって自分でできることを考えたり実行したりできるように進めたい。そのためには、自分の生活を見つめ直す時間や友達と比較して考えを広げる時間を十分に確保する。同様に自分でできることを家庭で実践したあとにも、実践して思ったことや新たにこうしたいと思ったことを振り返る時間と友達と共有する時間を確保する。その際、Googleスライドを活用することで、児童の活動をより具体的に共有できるようにする。交流の形態も、ペアと全体を使い分けることで、より活発な伝え合いになるようにしたい。児童から出てくる「家庭生活でしたこと」を大切に、本単元学習後も続けられるように指導していきたい。

また、時代と共に家庭を取り巻く環境が変化していることから、家庭の状況を踏まえた十分な配慮を行う。児童によって家族構成や家庭生活の状況が異なることから、各家庭や児童のプライバシーを尊重し、配慮する。そのため、家庭の理解と協力を得て、個々の家庭の状況を十分把握した上で、一人一人の児童の実態を踏まえた適切な学習活動を行うようにする。

○ICTの面について

Googleスライドの活用においては、交流・共有のツールということに留意したい。そのために、話し手は、相手を見て聞きやすい声で説明することや写真を指さして説明することを指導する。聞き手は、相手を見てうなずいたり反応したりすることを指導する。

7 単元の評価規準

		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準		・家庭生活について、調べたり、尋ねたりすることを通して、家庭での生活は互いに支え合っていることに気付いている。	・家庭生活について、調べたり、尋ねたりすることを通して、家庭における家の人のことや自分でできることなどを見付けている。	・家庭生活について、調べたり、尋ねたりすることを通して、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとしている。
小単元における評価規準	1	①家庭において、自分が家の人に支えられていることに気付いている。	①自分の生活と比較しながら、家の人々の生活を見たり聞いたりしている。	①家の人々の役に立ちたいという思いをもち、試行錯誤しながら、家庭での自分の役割を果たそうとしている。
	2	②家の人には、それぞれに果たしている仕事や役割があることに気付いている。	②自分が家庭で役割を果たしている姿を思い描き、家で取り組むことを決めている。	
	3	③自分自身が家庭を構成している大切な一人であることに気付いている。	③活動前の自分と今の自分を比較して、できるようになったことを話している。	②自分が家庭の役に立っていることを実感し、これからも自分の役割を果たしていこうとしている。

8 単元の指導計画・評価計画 (12時間扱い、本時は 8/12)

小単元	時	○目標	・学習活動	評価の観点		
				知	思	態
1じぶんのいちにちをみつめよう	1	小単元の目標 自分の生活と比較しながら、家の人々の生活を見たり聞いたりし、自分の生活リズムを整えるとともに、自分の生活が家の人に支えられていることに気づき、健康に気を付けて生活しようとするができるようにする。				
	2	○自分の生活と比較しながら、家の人々の生活を見たり聞いたりする。	・家での1日の生活を思い出す。 ・自分の家の生活を伝え合う。 ・気付いたことを書き出す。(思判表①)			
	3	○家庭において、自分が家の人に支えられていることに気付く。	・前時をもとに気付いたことを話し合う。(知技②)			

2 じぶんでできることをしよう	<p>小単元の目標</p> <p>自分が家庭で役割を果たしている姿を思い描きながら、家で取り組むことを決め、家の人にはそれぞれに果たしている仕事や役割があることに気付き、自分の役割を果たそうとすることができる。</p>				
	4	<p>○家の人には、それぞれに果たしている仕事や役割があることに気付く。</p> <p>●家庭で調べる。</p>	<p>・家の人が行っていることや、家の人にしてもらっていることを振り返る。（記録的評価なし）</p>		
	5	<p>○家の人には、それぞれに果たしている仕事や役割があることに気付く。</p>	<p>・調べてきたことを伝え合う。（知技②）</p>		
	6	<p>○自分が家庭で役割を果たしている姿を思い描き、家で取り組むことを決めている。</p> <p>●自分でできることに取り組む。</p>	<p>・家庭で自分ができていることを考える。実施するための計画を立てる。（思判表②）</p>		
	7	<p>○家の人への役に立ちたいという思いをもち、試行錯誤しながら、家庭での自分の役割を果たそうとしている。</p>	<p>・自分が取り組んだことを発表し合い、さらにできることを考え、ワークシートに書く。（態①）</p>		
	8	<p>○家の人には、それぞれに果たしている仕事や役割があることに気付く。</p> <p>●家庭でさらに取り組む。</p>	<p>・伝えるためのスライドを作成する。（記録的評価なし）</p>		
	9	<p>○家の人には、それぞれに果たしている仕事や役割があることに気付く。</p>	<p>・家庭で取り組んだことを友達と伝え合う。（知技②）</p>		
3 これからもつづけよう	<p>小単元の目標</p> <p>活動前の自分と今の自分を比較して、できるようになったことを見付け、自分自身が家庭を構成している大切な一人であることに気付き、これからも、家庭での自分の役割を果たしていこうとすることができる。</p>				
	10	<p>○活動前の自分と今の自分を比較して、できるようになったことに気付く。</p>	<p>・さらに続けていきたいこと、挑戦したいことを考える。（思判表③）</p>		
	11	<p>○自分自身が家庭を構成している大切な一人であることに気付く。</p>	<p>・自分が続けていることやそのよさを考える。（知技③）</p>		
12	<p>○自分が家庭の役に立っていることを実感し、これからも自分の役割を果たしていこうとする。</p>	<p>・自分が家庭や学校で続けていることや、続けてよかったことなどを考え、伝え合う。（態②）</p>			

9 本時の授業計画

(1) 本時の目標

家の人には、それぞれに果たしている仕事や役割があることに気付いている。

(2) 本時の流れ

	学習活動と内容	指導上の留意点	【評価の観点】 (評価場面や方法)
導入 (7分)	1.前時の復習をする。 ・自分は皿洗いを頑張った。 ・友達のを聞きたい。 2.めあてを確認する。	・児童が家庭で頑張ったことを振り返り、「友達に伝えたい」という意欲を高める。 ・伝え合うことを通して、これからどうしたいかを考えることを説明する。	
<div style="border: 1px solid black; background-color: #ffffcc; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> じぶんがしたことをつたえあって、これからしたいことをきめよう。 </div>			
展開 (33分) 5分 5分 15分 8分	3.自分のスライドを確認する。 ・部屋の片付けを頑張った。 ・毎日続けるのが大変だった。 4.交流のポイントを確認する。 ①頑張ったこと・思ったことを相手に伝えよう。 ②反応して聴こう。 ③相手のよいところを探そう。 5.ペアで交流する。 ・洗濯物をたたみました。 ・上手にたためたコツはある？ ・兄弟の世話をしました。 6.全体で交流する。 ・掃除を頑張りました。お母さんと一緒にしました。部屋がきれいになって気持ちよかったです。	・Chromebook の操作が苦手な児童には、個別に支援を行う。 ・児童が見通しをもてるよう、友達に伝えるための準備であることを伝える。 ・交流から気付きを得られるように、簡潔に話し手・聞き手のポイントを示す。 ・発表の型を示す。 ・隣の席の児童同士からスタートする。 ・その後はローテーションしていく。 ・よいやりとりがあったら中間指導で全体に伝える。 ・聞き手によかったところを発表させる。	【知技】 家の人には、それぞれに果たしている仕事や役割があることに気付いている。 (発言分析)
まとめ (5分)	7.気付いたことをまとめる ・自分は兄弟の世話をする役割があるな。 ・家で仕事をするとう気持ちがいいから続けたいな。 ・人によって取り組んでいることが違っておもしろいな。	・気付きをまとめる際の視点を示す。 ①自分の役割はなんですか？ ②これから自分がしたことはなんですか？(継続しても新しいことに挑戦してもよい。) ③友達と比べてみてどう思いましたか？(共通点と相違点)	

(2) ICT活用研究部

②アプリ研究班

1. 研究主題 「タブレットPC 1人1台の活用環境による主体的・対話的な学びの創造」 ～アプリの効果的な活用法～

2. 主題設定の理由

ICT（情報通信技術）の急速な発展は、グローバル化が進む世界に大きな変革をもたらし、児童の日常生活やライフスタイルにも影響を与えている。この高度情報化社会を生きていく児童にとって、ICTを適切に扱い情報活用能力を身につけていくことはとても重要なことである。

新学習指導要領では、情報活用能力（情報モラルを含む）などの資質や能力を育成できるよう、各教科等の特質を生かしつつ、教科等横断的な視点からの教育編成を図ることが求められようとしている。またタブレットPC 1人1台の活用環境の中で、各教科の特性に応じて、学習ソフトや地図記号アプリ等のアプリケーションソフトを活用することで児童の情報活用能力の育成につながってくると考えられている。アプリとは、メールや地図などの特定の目的をもって作られた専用のアプリケーションソフトウェアである。パソコンの世界ではソフトと略される一方、スマホの世界ではアプリと略されるのが一般的となっている。

本年度は市内の教職員の実践につながるような効果的なアプリ活用の授業研究を推進するために、上記のような研究主題を設定した。

3. 研究方法及び内容

本研究部では、児童の資質能力を育成するために、情報交換を進め、各教科等の学習においてアプリの活用法を探るべく、実践を積み重ね、研究を進めていく。アプリを活用した学習を体験した後、児童がどのように変容したかを見取っていくようにする。例えば、アプリを使って基礎基本の力が高まったこと、家庭学習で進んで取り組んだことなど、個別最適化の学習が挙げられる。また、アプリを活用して問題解決をすることや新しい物を作ることなど学習方法の選択肢の1つとして取り入れた場面である。児童の主体的な学びを広げることができると考えているからだ。

研究の初期段階では、アプリケーションソフトを情報共有する。次の段階では、研究部員一人ひとりが各学校で実際にアプリを取り入れた授業実践を行う。さらに学年や各教科等に応じたより効果的な活用法について研究授業を通して、検証する。最後の段階では、授業実践の成果を報告して、研究をまとめる。情報共有は、Google classroom を活用する。またアプリや実践報告を相視研理事会で紹介し、ホームページに掲載するなど情報発信を行っていききたい。

4. 研究経過

- ① 7月：アプリの情報共有（学習ソフト【ミライシード】タイピングソフト【キーボー島】等）
- ② 9月：研究部員が家庭学習を含む授業実践を考え、情報交換をする。
- ③ 10月：研究授業を行い、効果的な活用法を検証する。
- ④ 11月：研究部員が実践した成果と課題を情報共有する。
- ⑤ 12月：各研究部員がアプリを活用した授業実践を報告書にまとめる。
- ⑥ 1月：各研究部員による授業実践報告会を行う。
- ⑦ 2月：研究をまとめ、紀要を作成。

5. ミライシードの各ソフトの特長（家庭学習を含む）

研究部員が授業実践してみて、各機能の長所と短所をまとめた。（Google アプリとの比較を含む）

	ドリルパーク	オクリンク	ムーブノート	Google アプリと比較
基本機能	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の単元に合わせた練習問題 ポイント 宿題配信 	ペイント、カメラ・マイク、文字、インターネット、デジタル教材、ファイル	テキスト、問題文、選択肢、マーキング、スタンプ、ペイント、図形、カメラ、ファイル、Web リンク	
文字入力		横書き	横書き・縦書き	横書き
表現方法		カード（上限100枚）	私のノート（上限5枚）	
プレゼン		スライド機能（カード同士をつなげる）低学年から簡単にできる		【Google スライド】 ・多機能 高学年向け
双方向のやりとり		カードやスライドを相手に送信	「広場」で相手の考えにコメントや拍手	
共有		①提出BOXに送信し、カード・スライドを共有 ②画面共有ボタンで、教師または児童の画面を全体で一斉共有	私のノートを「広場」に送信し、提出したノートを共有	【jamboard】 最初から考えを共有
長所	<ul style="list-style-type: none"> 授業の適応問題 自主学习 ⇒反復練習 <p>【宿題配信】</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭に PC 持ち帰り（家にある PC も可） ⇒算数の課題 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを表現できる選択肢の1つとなる。（PC 入力が得意な子、文字を書くことが苦手な子にとって相手に伝わる表現ができる） 低学年が手軽にプレゼン機能を使用 他者と考えを共有 普段、発言できない子にとっても、いい意見を共有することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを作ることができる。 ⇒児童が提出しやすい 相手の意見に拍手やコメントができる。 ⇒双方向のやりとりがインターネット上で可能 スタンプ機能を使うと、絵に印をつけたり、人物の気持ちの変化を選んだりできる。 写真などを貼り付けるだけ良い。 	
短所	<ul style="list-style-type: none"> ●使い慣れている子とできる子の差がある。 ●手書きで丸付けのほうが子どもは喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●（国語）情景を読み取りたいのに、文字情報が優先して学びが深まらない。物語文より説明文向きかな。 ●縦書き入力機能がない。 		

6. 研究授業について

相視研 アプリ研究班 研究授業指導案

令和4年 10月 7日(金) 6校時 14:40~15:25 5年3組教室

授業者: 横山小学校 高橋 那央

第5学年 理科「流れる水のはたらき」

ICTの活用者 【○】 教員 【○】 児童

活用した ICT 【○】 Chromebook (内容: ミライシード内アプリ オクリンク) 【○】 大型テレビ

単元の目標	流れる水の働きと土地の変化を調べる活動を通して、それらについての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主に予想や仮説を基に、解決の方法を発想する力や主体的に問題解決しようとする態度を育成する。	
観点別評価規準	知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水には、土地を侵食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあることを理解している。 ・川の上流と下流によって、川原の石の大きさや形に違いがあることを理解している。 ・雨の降り方によって、流れる水の速さや量は変わり、増水により土地の様子が大きく変化する場合があることを理解している。 ・流れる水の働きと土地の変化について、観察、実験などの目的に応じて、器具や機器を選択して、正しく扱いながら調べ、それらの過程や結果を適切に記録している。
	思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水の働きと土地の変化について見いだした問題について、予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、表現するなどして問題解決している。 ・流れる水の働きと土地の変化について、観察、実験などを行い、得られた結果を基に考察し、表現するなどして問題解決している。
	主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水の働きと土地の変化についての事物・現象に進んで関わり、粘り強く、他者と関わりながら問題解決しようとしている。 ・流れる水の働きと土地の変化について学んだことを生活に生かそうとしている。

【単元計画】

目標	時数	学習活動	評価
(1) 川原の石			
・川の資料写真を見て、流れる場所による川や川原の様子の違いについて問題を見だし、進んでそれらの違いについて考えることができる。	1 本時	<ul style="list-style-type: none"> ・川の資料写真を見て、流れる場所による川や川原の様子の違いについて問題を見いだす。 ・川の写真を見て、山の中や平地へ流れ出た場所、平地の様子を比べ、違いを話し合う。 	[態度] 発言・行動観察
・いろいろな川の上・中・下流の様子を比較し、川や川原の石の様子の違いを流れる水と関係付ける。	1	・川と川原の石の様子の違いについてまとめる。	[知技] 発言・記録
(2) 流れる水のはたらき			
・流れる場所によって川の様子が違う理由に問題を見だし、流れる水と地面の様子の変化を調べる。	2	<ul style="list-style-type: none"> ・土の斜面に水を流して、流れる水の働きを調べる。(実験①) ・流れる水の働きについてまとめる。 	[知技] 発言・記録
・流れる水の働きで土地の様子が大きく変化するのとはどんな時かを予想し、自らの予想を基に、解決するための方法を考えることができる。	1	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水の働きで土地の様子が大きく変化するのとはどんなときかを予想する。 ・流れる水の量と土地の様子の変化との関係を調べるための方法を考える。 	[思判表] 発言・記録

<ul style="list-style-type: none"> 水の量を変えて流れる水の働きを調べるモデル実験を行い、水の速さや地面の削られ方を記録する。 	1	<ul style="list-style-type: none"> 流す水の量を変えて、流れる水の働きを調べる。(実験②) 	[知技] 行動観察 発言
<ul style="list-style-type: none"> 水の量と流れる水の働きとの関係について、実験結果を実際の川に当てはめて考え、土地の様子が大きく変化するのはどのようなときかを捉えることができる。 	1	<ul style="list-style-type: none"> 水の量と流れる水の働きとの関係について、実験結果を実際の川に当てはめながら考え、まとめる。 川の資料写真を見て、それぞれの土地がどのようにしてできたかを考える。 	[思判表] 発言・記録 [知技] 記録
(3)わたしたちのくらしと災害			
<ul style="list-style-type: none"> 川の水による災害や災害に対する備えについて調べ、災害に備えることの重要性を考えることができる。 	1 (2)	<ul style="list-style-type: none"> 川の水による災害や災害に対する備えについて、調べたり考えたりする。 	[思判表] 記録
(4)川の観察			
<ul style="list-style-type: none"> 実際の川を観察して、川や川の周りの土地の様子、災害を防ぐ工夫について調べ、流れる水の働きについて考えることができる。 	2	<ul style="list-style-type: none"> 実際の川を観察して、川の様子や流れる水の働きを調べる。(観察①) 	[思判表] 発言・記録
<ul style="list-style-type: none"> 学習を振り返り、流れる水のはたらきと土地の変化についてまとめる。 	1	<ul style="list-style-type: none"> 流れる水の働きについて、学んだことをまとめる。 	

【児童の ICT 活用能力】

本学級の児童は、2学期から理科、国語科の学習でオクリンク使用している。国語科「たずねびと」では、「楠木綾」の気持ちの変化に焦点をあて、場面ごとに心情の変化をまとめたり、物語文の続きを作成したりした。下記添付資料。



理科「花から実へ」の導入時の学習では、校庭に咲いている身近な花や草をまとめ、発表を行った。下記添付資料。

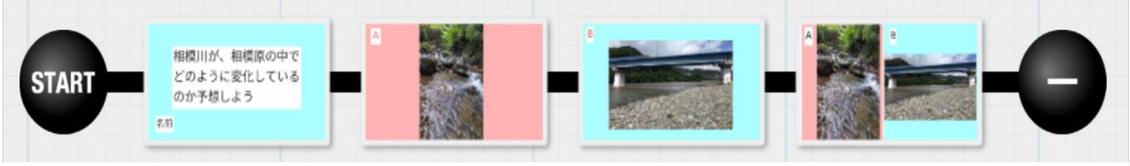
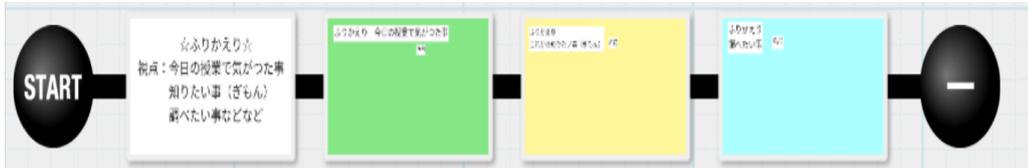


その後の社会科の学習やゴーヤの観察などの学習でも、教師が「オクリンク」の使用の声をかけなくても、児童が使用を求める姿勢が見られ始めている状況である。以前から、Google workspace のジャムボードやスライドを使用してきたため、操作面で多少の違いはあるものの、大きな支障はなく取り組むことができていると感じている。しかし、その反面どのように発表をするのか、考えた事やわかった事をどのように共有するのかの教師側の授業展開の部分で課題を感じる部分がある。

本時では、オクリンクを使用することで、相模川の順番の考えを発表したり、友だちの意見を聞いたりすることで、自分の意見と比較し、自己の考えを深めたり広げたりする力の向上を目指したい。

【本時の目標】（1 / 12 時間目）

相模川の様子を表した写真を比較し、相模川が相模原の中でどのように変化しているのか気づき、考えを表現することができる（態度）

学習活動	
<p>導入 (5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「流れる水」のイメージを発表し、身近な「川」や「相模川」があることに気づく。 ・テレビ画面及びオクリンク内で画面共有をかけ、上流・下流の写真を提示し、違いを発表する。→この時、上流、下流の言葉は使わない。 
<p>展開 (20分)</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p style="text-align: center;">相模川が相模原のなかで、どのように変化しているのか予想しよう</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・4枚の写真を元にどのような違いがあるのか比較し、相模川の順番を今までの経験や知識と関係づけさせながら予想する。※書ける児童は、理由も書かせる。（オクリンク、ノート） ・まず、個人で考えをもつ時間を設定し、その後グループで考えを共有する時間をもつ。 ・早く提出し終えた児童は、提出BOX内で、他の児童の考えを閲覧する。 
<p>終末 (20分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教員機の提出ボックスを利用して、どのような順番になると思ったのか、どうしてそう思ったのか（理由）を発表する。→児童の考えを黒板に提示し、考えを整理する。 ・納得した事、付け足しなど伝えたいことがある児童には、その場で発表させる。※写真の順番の正解は発表しない。 <p>【本時のふりかえり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習で気がついた事、疑問、調べたいことをオクリンクにまとめ、提出をする。 ・提出ボックスを切り替えて、今後の課題を共有する。 ・オクリンクを使った感想を発表する。 

■ ICT の活用による主体的・対話的な視点

【支援面】

・書くことが苦手な児童にも相模川のちがいや自分の考えを、オクリンクに表現することができたか。

【活動面】

・オクリンクは、自分の考えと友だちの考えを比較し、自分の考えを広げたり深めたりできたか。

・ノートに書くことが得意な子が、オクリンクに自分の考えを表現することができたか。

【環境面】

・終末：黒板に相模川の変化の写真を提示し整理することで、児童の考えを深めたり広げたりできたか。

7. 成果と課題

研究授業後に協議会を行い、成果と課題を話し合った。

次のような成果があった。

①多機能を効果的に使い、自分の考えをより分かりやすく表現

支援面においては、オクリンクで自分の考えをまとめる時間を十分に確保することで、児童の多様な気づきを見いだすことができた。それぞれの児童がタブレットPCの画面を手元に置き、写真を拡大して見ることができ、視覚的に見やすく、自分の考えを表現しやすい様子が見られた。矢印や色などの機能を使い、自分の考えをより分かりやすく表現していた。



②自分の考えを学級の友だちと共有できる利点

活動面においては、児童同士が画面を共有することで、自分の考えと友だちの考えを比較し、共通点や相違点を探し、学びを広げていた。オクリンクの提出ボックスを児童同士がみることができるよう公開することで、ノートに書くことが得意な子だけでなく、発表ができない子や挙手ができない子にとって、自分の考えを友だちと共有することができる利点があった。



③オクリンクと黒板の組み合わせにより、学びを広げる

環境面においては、2枚の写真の導入を行ってから課題のカードを送るという流れが児童の学ぶ意欲を高めた。終末に行った全体交流の際、黒板に相模川の変化の写真を使って整理することで、児童の考えがさらに深まった。また、流れる川の順番を調べたい児童の発言から次時への意欲が高まった。

オクリンクで自分の考えを表現・他者との共有、黒板で全体交流を組み合わせることで主体的な学びがより高まることが分かった。



課題は次の通りである。

①対話の時間を設定し、伝える力を高める

共有の仕方に工夫が必要だった。「川の様子から気づいたことを書いてみよう。」に対して、自分がなぜそう思ったのかを相手に伝える視点を持たせた方が良かった。児童の実態を配慮して、個の時間を十分に確保したため、すぐに全体交流となった。3～5分間程度、ペアまたはグループでの対話の時間があつた方がより自分の考えを伝える力を高めることとなった。

②振り返りカードを送るタイミング

全体交流で児童が発表している時に、振り返りカードを入力している児童がいた。先に振り返りカードを送ってしまうと、先に取り組んでしまう欠点があった。その児童にとっては、友だちの考えをオクリンク上で見ているので、全体交流で発表を聞かなくても良いと思っているのかもしれない。

③オクリンク上での共有する時間や、他者と交流する時間による学びの価値付け

オクリンクで児童の考えを共有できるようにすると、ペア交流、グループ交流、全体交流が同じ活動の繰り返しになってしまう可能性が大いにある。対話の時間の際、何を交流させたいのか、どんな発問で学びを深めさせたいのかを教師がねらいをしっかりと持っていないと児童の学ぶ価値が変わると考えさせられた。



研究協議会では、教育委員会から指導主事2名、ベネッセ担当者2名が参加した。指導主事から授業の感想を聞き、ベネッセ担当者から提出ボックスが複数使用できる新機能を知るなど、今後の授業実践につながる機会となった。

8. 実践記録

市内の教職員たちが実践できるような再現性のあるアプリ活用の授業研究を推進するために、自らが実践経験を積むことを目標にして各学校で授業実践に取り組んだ。アプリ教材は、ミライシードのオクリンクまたはムーブノートを中心に扱った。1月の研究部会では、実践報告会を行った。



【写真：報告会の様子】

【各部員の実践報告より】一部抜粋

- ・算数科で問題作りをオクリンクで行うことにより時間短縮になった。
- ・1年生国語科でオクリンクのデジタル教材を活用した。
- ・社会科で地域の安全を守る設備をオクリンク上で地図にまとめた。
- ・外国語活動で形作りから手紙にする学習をムーブノートで取り組んだ。
- ・6年総合的な学習の時間に世界遺産について調べたことをオクリンクでまとめ、発表したこと。
- ・6年国語科でWeb原稿やオクリンクを活用して、座右の銘について文章をまとめたこと。



さらに高橋教諭が実験の時にタブレットPCを児童が選んで学習するなどの研究授業後の変容を報告した。実践報告会を通して、時間短縮や発達段階に合わせた教材、教科単元の内容に合わせた活用法などを学んだ。

相視研共有ドライブかつミライシードのラボに、各部員が取り組んだ実践記録を残す。

☆各部員の実践報告資料☆

https://drive.google.com/drive/folders/1s_wy1GIVXgp2uzh5t03VXju5inNsUNjd?usp=sharing



ラボ

9. 本研究を通して来年度に向けて

各部員がミライシードを含むアプリケーションソフト（以後アプリと呼ぶ）を活用した授業の実践（PC持ち帰りによる家庭学習を含む）を積み、それを共有し、実践例として蓄積できたことは大きな成果だったといえる。各部員の実践を共有することにより、アプリ活用の長所や短所に気づき、次の授業へよりよく生かす機会となった。さらに実践データを保存することにより、市内の教職員が手軽に参考になれるような環境を整え、アプリ活用の実践を推進することもできた。

研究授業では、多機能を効果的に使い自分の考えをより分かりやすく表現し、学級の友だちと共有できる利点やオクリンクと黒板の組み合わせにより、学びを広げるといった成果を見いだした。課題としては、対話の時間を設定し、伝える力を高めることや、振り返りカードを送るタイミング、オクリンク上での共有する時間や、他者と交流する時間による学びの価値付けが挙げられた。

次年度は、「伝える力」を高める効果的な活用法を追究していく。インターネット上での共有の時間と、他者との対話の時間との、活動の違いを持つことで児童の学びがさらに深まるような授業実践を積み重ねていきたい。

(2) ICT活用研究部

③プログラミング教育研究班

1. 研究主題

「プログラミング教育を通して育てたいもの～人とコンピューターをつなぐ～」

2. 主題設定の理由

近年、社会の情報化は急速な発展を遂げ、「第四次産業革命」と呼ばれる大きな変革の時を控えていると言われてしている。そこでは、人工知能（AI）やIoT（Internet of Things）などの実現により、経済産業社会システム全体が大きく変革されることが予想され、コンピューターの必要性が大きく高まっている。さらに、新型コロナウイルスの世界的な蔓延に伴って、人と人、人とモノとが直接相対せずオンラインでつながる必要性が増えたことも加え、人とコンピューターは、今まで以上に手を携えながら、新しい世界を作っていく必要があると考える。

国内では、平成29年3月に示された新しい学習指導要領の本文において、プログラミング教育に関わる事項が明記された。さらに文部科学省から示された「小学校プログラミング教育の手引」には、プログラミング教育の必要性が、コンピューターと人との距離が近くなった現代において、その仕組みや振る舞いを知ることが大切であることや、プログラミング教育を通してプログラミング的思考を身につけていくことは、学習の基盤となる資質能力を育てることにもつながる、と記されている。

つまり、コンピューターの存在は、これからの社会を作っていくためには必要不可欠であり、プログラミング教育を通して人とコンピューターはよりつながっていけるのであると言える。

相模原市では、平成29年度より小学校におけるプログラミング教育を全市一斉で先行実施している。昨年度には小学校6年間を通じた小学校プログラミングプランが提示され、プログラミング教育に率先して取り組んでいる。指導者には資料や研修が用意されており、用意された教材を活用することでプログラミング教育の実践がしやすくなる体制が整備された。以上のことを踏まえ、本研究班では明星大学と共同で研究を行い、プログラミング教育の実践を共有し、授業の改善を目的として上記の研究主題を設定した。

3. 研究方法及び内容

本研究部では、プログラミング教育の研修や情報交換を行う中で、児童のプログラミング的思考力を各教科等の授業で育み、既成のプログラミングにふれることでコンピューターを使った情報処理の有用性を感じられるようにするための授業実践の研究を進めていく。

昨年度までの研究では、小学校中学年部会・高学年部会ともに一学級内で実践が完結するような授業プランを立てずに、他学級や他校とのつながりがあるような授業実践に関する研究を行った。コロナ禍で実践が思うようにいかない部分もあったが、GIGAスクール構想の進展で、一人一台端末の環境が整備されたことにより、実践が行いやすくなった。

このことを受けて、今年度も他学級や他校とのつながりがあるような授業実践に関する研究を行っていく。特に、プログラミング教育では探究的な活動が行われる単元プランを計画することが多いことを考え、総合的な学習の時間における実践を考案していきたい。

<研究授業について>

数年間、コロナ禍で研究の速度がゆっくりになっているところは否めない。今年度は研究授業を計画し、児童の姿や変容について論じることができるように進めていきたいと考えている。

4. 研究日程

- ① 7月：情報共有・顔合わせ・授業者について
- ② 9月：単元計画の考案
- ③ 10月：研究授業検討
- ④ 11月：研究授業検討
- ⑤ 12月：研究授業協議
- ⑥ 1月：研究のまとめ
- ⑦ 2月：相視研理事会で実践研究報告をする。

5. 研究実践

- ① 7月：情報共有・顔合わせ・
- ② 9月：情報交換
- ③ 10月：情報交換・研究授業について
- ④ 1月：研究授業・授業協議
- ⑤ 1月：授業協議・情報交換
- ⑤ 2月：相視研理事会での実践研究報告

研究日に部員の出席の都合が合わず、協議をしながら研究授業を作っていくことが難しかった。そのため、他学級や他校とのつながりのある授業ではなく、できる範囲でのプログラミング教育の実践ということで研究授業を計画した。

6. 研究授業について（次ページ参照）

7. 研究協議

＜山中先生から＞

- ・プログラミングのよさは、繰り返しにある。繰り返しの活用ができるような単元計画があるとよかったのではないかな。
- ・プログラミングという言葉は可謬的（まちがえる可能性があること）にとらえられがち。教師はそこを意識した方が良い。（めんどくさい、苦手、というのはやりたくないを言い換えただけ）
- ・演算の乗算記号が×ではなく*であることを小学生の段階で知ることが意味がある。大きくなってからでは、それでさえも理解の障壁となる場合がある。
- ・プログラミングとつきあうことの意味（非常に論理的なものを相手にしているということと、試行錯誤（試行だけではうまくいかない）を求められるものであるということ）
- ・教師も答えが見つからないことを子どもと追いかけることができるのがプログラミング教育である。
- ・自分たちが作ったものが自分の望んだ通り動くか試してみる姿があった。乗算のプログラミングに簡単な数字を入れて、正しい答えが表示されるか試せる、というのは大切な姿勢。

8. 来年度に向けて

研究授業後の協議では、コンピュータープログラミングの利便性が理解できているか、という話よりも、プログラミング教育自体がもっている可能性——プログラミングは非常に論理的だし、伝えなければ伝わらないし、試行だけをしては何も答えてくれない。教師が子どもに伝えづらい「ちがう」ということをはっきりときちんと伝えてくれる——に気づかせてくれるような話が多くあった。このことが今後の研究の方向を考える指針となるのではないかと思う。（その意味で言えばプログラミング教育は体育科における技能の向上をしていくための問題解決の手順と似ているのではないだろうか）

一方で、文部科学省が新学習指導要領で記述しているプログラミング教育についての内容も研究を進めていくには指針とすべきであり、今一度読み込み、検討する必要があると思う。

来年度は、上記のことをふまえ、文部科学省の方や指導主事の先生からアドバイスをいただくところから研究をスタートしていければと考えている。

総合的な学習の時間・算数科 学習指導案

- 1 日 時 令和5年1月19日(木)6校時 14:45～15:30
- 2 場 所 4年1組教室
- 3 学年・学級 第4学年1組 27名
- 4 単 元 名 「プログラミングを使おう」「広さの表し方を考えよう」

5 単元について

(1) 児童観

本学級の児童は、様々な学習に対して意欲的な態度で真面目に臨むことができる児童が多く、落ち着いた雰囲気の中で、前向きな気持ちで課題に取り組むことができる。話し合い活動や意見集約をする場面では、話をする子が限られてしまうが、よく聞くことができる子もあり、指名をして発言をさせるとしっかりとした考えを話すことができる児童が多い。

また、GIGAスクール構想の進展に伴い、本学級の児童は、GIGA端末を用いた学習活動を日常的に行っている。ドリル学習や調べ学習での使用から、classroomやミライシードの「オクリンク」を通しての話し合い活動、行事実行委員での使用、係活動でのアンケート使用などまでと、多岐にわたってICTを活用して日々の学校生活を送っている。そのため、キーボードを用いて文字入力することなどに抵抗感を抱く児童もほぼおらず、学習のためのツールとしてICT端末が機能している現状であると言える。

プログラミングの経験については、Scratchを中心としてブロック型のコーディングの経験を積んでおり、「あるスプライトが自動的に動き、壁際まで動いたら反転して動き続ける」というような課題を出すと、順次・反復・分岐のコーディングを自ら行える児童が増えてきた。変数を定義し、代入したものを簡単な演算式を経て、出力する考え方についても身につけ始めている。

(2) 教材観

使用するプログラミングソフトはScratchとする。理由としては、児童がScratchを今までの学習で使用した経験が数多くあることや、今回行う活動である、簡単なソフトウェア開発を行うには、ブロック型のコーディングを行うことができるScratchが適していると考えられるからである。

また、プログラミングは問題解決の手段として使われることで、はじめてプログラミングを学ぶ必然性が生まれる。様々な教科の様々な学習活動の中で、プログラミングと親和性の高い活動を選択する必要があるが、今回は算数の面積を求積する活動を題材として考えた。

小学校4年生で学習する面積の単元は、求積の公式として、たての長さ×よこの長さ、という単純な式を理解すれば良い単元である。その意味で言えば、面積を求める活動は児童にとってそこまで難しい内容ではないため、定着もよく、抵抗感も少ない。

そこで、この題材をプログラミングを使って自動的に求められるソフトウェアを開発するような活動が行えればと思い、計画をした。

(3) 指導観

プログラミング教育を扱うときに、プログラミングを教科の学びを深める手段とするか、また教科の学びを子どもがプログラミング観を深める手段とするか、目的と手段を明確にして指導していくことが必要であると言われることがある。単元計画や授業の内容によってはどっちつかずの中途半端な展開になってしまい、学びが深まらない様子が見受けられることがある。

今回、本単元では身に付けたプログラミング技術をもとに簡単なソフトウェア開発を行う活動を計画した。具体的には、面積を自動的に求積するプログラミングを自分たちでコーディングして作成する活動である。このように、プログラミングの学習で身に付けた基本的なコーディングの技術と、算数の学習で学んだ知識・技能の両者が必要な単元をデザインすることで、プログラミング教育のねらいの1つとしての「プログラミングの利用への気付き」と面積の単元の学習のねらいの1つである「図形の構成要素に着目する」などの算数的な気付きの両方が深まるのではないかと考えている。

単元全体は3時間で構成し、最初はプログラミングが生活のどのような場面で活かされているか動画で視聴したり、どんな場面で使われているか調べたり実際に使ったりするなどして、プログラミングの利用価値について知識を深めていく。その上で、自分たちの学習に活用できないか検討し、算数の学習での活用が考えられるようにしていく。

本時は、実際に面積を自動的に求積するプログラミングをグループでコーディングしてみる活動を行う。個人でのコーディングではなく、教師側で意図したグループ分けでのコーディングを行わせることで、グループでの差があまり生まれないようにする。

その中で、クラス全体の進捗状況に応じてグループ毎での作業を止め、悩みや気付きをシェアリングし、活動が間延びしないようにするとともに、他のグループから気付きが得られるようにする。

また、終末はグループ毎にどのようなコーディングをしたかを発表し、単元のまとめとする。

しかしながら、本単元は面積を求積するプログラミングが作れることはゴールとしていない。それよりも終末の気付きの中で、プログラミングの可能性や難しさや便利さに気づいたりすることが大きな目的として設定したい。

6 単元の見目標

算数の学習で学んだ知識・技能を活用したプログラミングを組み立てることで、プログラミングが問題解決のための手段であることに気づくとともに、図形の構成要素に着目して立式する思考力を養うことができる。

7 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミングが生活にどのように活用されているか理解する。 ・Scratchを使って簡単なソフトウェアを開発することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミングが生活のどの場面で使われているかについて学習課題を考え表現している。 ・調べたことや考えたことをもとに自分の思いを表現しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミングが生活のどの場面で使われているか興味をもって調べ、学習を振り返ったり見直したりして学習課題を追求・解決しようとしている。

8 単元の指導計画・評価計画(3時間扱い 本時は3/3)

時間	○目標	・学習活動	評価の観点		
			主	思	知
1	<総合的な学習> ○プログラミングが生活のどのような場面で使われているか調べ、自分も利用してみようと考えてみる。	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラミングが生活のどのような場面で使われているか動画を視聴したり調べたりする。 ・調べた内容を共有する。 ・生活で使われているプログラミングのうち、ボタンを押すと作動するプログラミングの構造に興味をもつ。 	○		
2	<総合的な学習> ○ボタンを押すと動くシステムを作り、プログラミングがどのように生活にいかされているか実感する。	<ul style="list-style-type: none"> ・Scratchを使って、ボタンをおすとながか作動するプログラミングの構造を考え、理解する。 ・学んだ構造を活用して、簡単なシステムを作ってみる。 		○	
3 本時	<算数> ○長方形や正方形の面積が自動的に求められるプログラミングを作ってみる。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を把握し、解決法を考える。 ・プログラミングを活用することを考え、長方形や正方形の面積が自動的に求められるプログラミングをグループで考える。 ・グループ毎にどのようなコーディングをしたかを発表する。 ・単元のふりかえりをする。 			○

9 本時の授業計画

(1) 本時の目標

面積を求めるプログラミングを作る活動を通して、簡単なソフトウェアを開発しようとし、プログラミングの利便性

に気づくことができる。

(2) 本時の流れ

○学習活動 ・児童の反応	○指導上の留意点
<p>○たて3.7センチメートル、横6.2センチメートルの長方形の面積を求めようとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長方形の面積の公式はたて×よこだったね。 ・そうしたら、式は3.7×6.2だね。 ・小数のかけ算はどうやってやったらいいの？ ・何か計算をするいい方法はないかな。 ・プログラミングを使って面積を求めることができるかな。 	<p>○色画用紙を使って課題を出し、学習課題を把握しやすくする。</p> <p>○未習である小数のかけ算をどう解くかについて、0.1がいくつあるか、をもとにして考える方法などが出ても、その解法のよさを認めながら、どんな数字になっても求められる方法がないか、考えられるようにする。</p> <p>○所要時間は5分程度。</p>
<p>○はじめにと</p> <div data-bbox="416 819 1198 909" style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>面積を求めるプログラミングを作ってみよう。</p> </div> <p>・自分でゲームを作ったことは、はじめて「こんなのを作ってみたいな」と考えるね。</p> <p>・では、最初にどんなプログラミングを作ったらよいか考えてみよう。</p> <p>・スクラッチのネコが「たての長さは何センチ？」と聞いてくるようにしたらどうか。</p> <p>○デザインをしたプログラミングが自分の考えた通りに動くようにブロックを組んでいく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんなプログラミングを組んだらいいかな。 ・こんな工夫をするといいね。 <p>○どのようなプログラミングができたか発表しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そうか、そうやってブロックを作ればいいんだね。 ・すごい、これならどんな面積でも求められるね。 	<p>○あらかじめグループ編成しておく。</p> <p>○児童の様子を見ながら、手がかりとなるような声かけを適宜行っていく。</p> <p>○クラス全体の進捗状況に応じてグループ毎での作業を止め、悩みや気づきをシェアリングし、活動が間延びしないようにするとともに、他のグループから気づきが得られるようにする。</p> <p>○全部のグループができなくても、数グループが完成したら、できたグループだけ発表をする。</p> <p>○できたグループのコーディングを見ながら、どんな工夫があるか、確認していく。</p> <p>○できあがったプログラミングの良い点を話し合いながら、どんな数字でも求められることや何度でも使えることがわかるようにする。</p> <p>○どことも作れていない場合は、教師が作成したプログラミングを見せる。どのような作りになっているかを見せて、どんな工夫があるか、話し合えるようにする。</p>

<p>○単元のふりかえりをする。(プリント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わからない問題でもプログラミングをうまく使うと求められることがわかった。 ・プログラミングができるようになると、難しい計算でもすぐにできることがわかった。 ・プログラミングがとても便利なものであることがわかった。 	<p>○個人でふりかえりを行い、その後で、どんなことを書いたか全体で共有をする。</p>
--	--

(3) 本時の評価

面積を求めるプログラミングを作る活動を通して、簡単なソフトウェアを開発しようとし、プログラミングの利便性に気づくことができたか。

(3) 番組活用研究部

1. 研究主題

「授業実践における放送番組の効果的な活用」
～いつでも、どこでも、だれでも、番組を活用できるように～

2. 主題設定の理由

本研究部では、NHK for school を中心とした放送番組を活用した研究を行ってきた。NHK for school を中心とした理由として、学習指導要領に対応しており、常に番組がアップロードされていること、インターネット環境下で、だれもが視聴できること、そして、番組のみならず、要点をまとめたビデオクリップや、番組を活用する展開例やワークシートなども充実していることなどが挙げられる。

今年度、研究を始めるにあたって、それぞれの学校の現状について情報交換を行った。多くの学校から「番組を活用している人は活用しているが、広がりはあまり感じられない」という意見が出された。これまでの本研究部の研究成果から、番組の活用により学習内容の理解に効果が上がっていることは実証されていると考え、今年度は、学校における番組活用率の向上について、研究を行うこととした。

3. 研究方法及び内容

本年度の研究は、それぞれの学校で番組を活用した実践を行い、レポートにまとめ、Google ドライブの共有ドライブに格納することにした。格納されたレポートを元に、活用事例について、それぞれの学校で情報提供を行い、番組の活用率の向上を目指すこととした。

4. 研究経過

- 7月 研究について（概要、方法、今後の流れ）
- 9月 実践の報告、情報交換
- 10月 実践の報告、情報交換
- 1月 研究のまとめ、研究紀要づくり
- 3月 研究紀要

5. 研究内容

本年度の研究は、それぞれの学校で番組を活用した実践を行い、レポートにまとめ、Google ドライブの共有ドライブに格納することにした。格納されたレポートを元に、活用事例について、それぞれの学校で情報提供を行い、番組の活用率の向上を目指すこととした。

国語、社会、理科、音楽、体育、家庭科、道徳、総合などたくさんの教科で実践したレポートが提出された。レポートについては、一部を参考資料として最後に添付している。

[成果と課題]

たくさんの教科で実践したレポートを共有ドライブに入れることで、各校でそのレポートを活用して情報を提供することができた。各校の実践から見えてきた成果と課題をまとめてみた。

<成果>

- ・一人ひとりがレポートを作成することで、主体的に研究に参加することができていた。
- ・レポートを作成するときに校内の他の先生が興味をもって来て、道徳における番組活用の有用性を伝えることができた。レポートも文章で残るので、時間のあるときに見てもらえることができ、有効だった。

- ・様々な実践レポートがあることで、少し番組活用に壁を感じている先生方に番組の活用方法や活用のタイミング等を伝えることができ、活用の壁を低くすることにつながることができた。
- ・初任者や学年団の先生など、番組を活用したことのない先生方に、その活用の有用性を伝えるよい機会となった。
- ・レポートを参考にすれば、NHK for school を活用した授業実践を自分の学校の苦手な先生に紹介し、番組を活用した授業を勧めることができた。番組を知らない先生も多くいるので、いろいろな番組を紹介するためにも有効だった。
- ・児童からは番組を活用した授業が楽しみだという声があがった。
- ・今年着任した先生が家庭科の指導に難しさを感じている様子があったが、番組を紹介すると、とても喜んでいて。番組を見せたり、必要に応じてクリップだけを見せたりして、その時に必要な指導に応じて番組を活用することができたと喜んでいて。
- ・番組を活用した授業に、学年の先生が興味を持ってきて、番組選びを一緒にして授業を行ってくれた。
- ・番組を活用していることを他の先生が知ったことで、マネをして取り組んでくれた。

<課題>

- ・学年の先生などにも取り組みを紹介したが、なかなか取り入れづらい様子もあった。
- ・子どもたちは好き。教師側が取り入れることに課題がある。
- ・教科書で済む。
- ・指導の中身を見たときに、必要性を感じない。
- ・たくさん番組やクリップがあり、選びきれない。
- ・番組や動画を使っている人もいれば、いない人もいる。紹介だけでなく、番組をこのように使えば授業の学びも深くなる研修などが必要だと感じた。しかし、タブレット PC 導入で他に覚えることが多くあり、経験の浅い先生たちには、情報過多になってしまうような気がする。
- ・アナログとデジタルの融合
- ・使い方を教える時間（研修）の確保
- ・道徳は、低、中、高で分けられているので、3年生でやった学習を4年生でやらないように注意しなければならないと思った。そのため、履修したことが重ならないように考える必要があると感じた。
- ・紹介や伝達だけでは、なかなか取り組むのは難しいと思うので、一緒に取り組んだり、活用したことがある先生の同じことをしたりすることで、取り組んでもらえるのではないかと思う。
- ・同じ学年の先生に道徳の取り組みをすすめたが、普段と違う取り組み（教科書の題材を使う）だったため、教材研究に少し時間がかかった。
- ・いい意味でも悪い意味でも、番組、クリップの種類が多すぎて、どれが最適なものなのかの判断に迷うことがあった。
- ・番組が好きになりすぎて、「道徳」＝「ココロ部」という児童も多かった。偏りがないように活用していくことも大切だ。

6. 来年度に向けて

それぞれの成果と課題から、番組の活用をさらにたくさんの人に広めていくためには、実践例を集め、互いに共有し合うことが大切だと考えた。また、研究部員の学校だけでなく、市内の学校の状況を調査し、ニーズに合わせた情報発信も大切な視点となると感じた。市内の多くの先生方の声をアンケートなどで集めることでより現場のニーズにあった研究を推進していきたい。その上で担当者だけでなく、学校の中で「いつでもどこでもだれでも」が、教材研究や授業の展開の中で、より多くの番組を効果的に活用できるように、情報を発信し続けていくことが重要であると考えている。

<添付資料①>タイトル「だれを先に乗せる？」

レポート作成者：相模原市立田名小学校
名前：平野 貴博

対象の学年・クラス：5年1組

教科：道徳【親切・思いやり】

行った時期：10月上旬

活用した番組：「ココロ部！」【第5回】

URL：

https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005130355_00000

<番組を活用したねらい>

学年で道徳の交換授業を行っているため、割り当てられた価値項目に近い内容の物を選んだ。

<番組の内容>

山道でバスが故障した場面に遭遇し、自分の車に乗せて下山させてあげようとする主人公。バスの乗客は5人、車に乗れるのは3人。誰を乗せれば良いのか、「思いやり」とは何なのか。葛藤し、考えられる内容となっています。

<子どもたちの反応>

場面の状況や考えることが分かりやすく焦点化されていたため、普段発言が少ない子どもも挙手をして考えを述べていた。

【子どもの感想より】

- ・思いやりとは、もしだれかが困っていたら、見た目や年齢、人付き合いでは決めずに、相手の立場や状況がより深刻であるほど助けてあげるとのことだと思います。
- ・思いやりとは、人の都合や話を聞いてその答えで決めること。
- ・思いやりとは困っている人を助けること。でも、人の話を聞かなきゃいけない。
- ・他の人の事情を聞くこと、自分のことより相手のことをよく考えて話し、行動することが思いやり。

<作成者からのオススメコメント>

子どもたちにNHKforSchoolを使った授業がどうだったか聞いたところ、27人中27人全員が良かったと答えました。「楽しい」といった感想以外にも「何を考えれば良いのか分かりやすかった」と具体的に良さを語ってくれる子どももいました。有名なお笑い芸人が出演していることや内容が面白く興味深いため、多くの子どもが引きつけられていました。



出典：NHK for school ココロ部！#5「だれを先に乗せる？」より

<添付資料②> 「話し合いのやり方のポイントを伝授してもらおう」

レポート作成者：相模原市立鹿島台小学校
名前：井手 哲

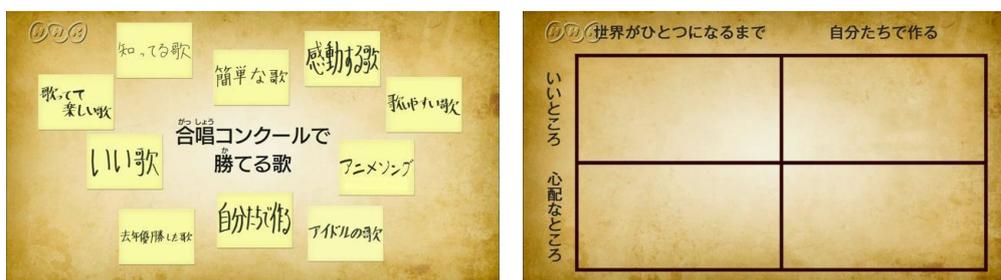
対象の学年・クラス：3年1組
教科：国語【対話の練習・話し合いの進行】
行った時期：9月ごろ・10月ごろ
活用した番組：「お伝と伝じろう」

対話の練習：【第9回 何を話し合ったの】

https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005150169_00000

話し合いの進行：【第10回 ピンチ！意見が対立】

https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005150170_00000



出典：NHK for school お伝と伝じろう # 9「何を話し合ったの？」
10「ピンチ！意見が対立」より

<番組を活用したねらい>

どちらの回も、グループの話し合い活動におけるポイントが確認できる内容となっている。この2つの回は、つながっている内容なので、学習する時期が近い2つの単元での活用を考えた。グループの話し合いでのつまずきポイントが分かりやすく整理されているので、ポイントが押さえやすいと考えた。

<番組の内容>

対話の練習では、考えの「見える化」と「グループ化」について学ぶことができる。
話し合いの進行では、考えをまとめるためのポイントについて学ぶことができる。

<子どもたちの反応>

どちらの回を視聴しても、視聴後に「話し合い活動をやってみたい」という意欲を持つ子が多かった。

【子どもの感想より】

- ・話し合いでけんかにならないようにやりたいです。田の字チャートを意識してやりたいです。
- ・まとめて決めるのが難しそうだったけど、田の字チャートをおぼえたから、もう大丈夫だと思いました。
- ・番組を見て、うまく「見える化」と「田の字チャート」を使って話し合いたいです。
- ・田の字をもっと使っていきたいです。最後にあんな風に決まっていくなと思いました。
- ・お互いに歩み寄ることと田の字チャートを使えばいいことがわかりました。

<作成者からのオススメコメント>

この番組も、番組制作者のねらいなのか、濃いキャラクター（伝じろうくん）が登場しますが、子どもたちは一度見るとキャラクターには慣れるらしく、すんなり「学ぶポイント」を押さえることができます。今回の2つの回は、3年生だけでなく、グループでの話し合い活動を行う前に、復習で見ると、ポイントを確認でき、よりよい話し合い活動が生まれるかもしれないと感じました。

(4) 中学校研究部 研究報告

1. 研究主題

「Chromebook を中心とした ICT 機器の効果的な活用～事例の集積と整理～」

2. 主題設定の理由

コロナ禍により加速した「タブレット一人一台」貸与も、3年目を迎えた。本研究部では昨年度より ICT 機器の効果的な活用に関する事例集積を行ってきた。学習指導要領で謳われている「主体的・対話的で深い学び」「学習の個別最適化」において、ICT 機器の活用が効果的であることは、論を俟たない。したがって、本年度も従来の研究を踏襲し発展させることを目的とし、上記テーマを設定した。

小中学校時代からスマートフォンやタブレットを日常的に使用してきた世代が、相模原市小中学校教員に新採用として教壇に多く立ち始めている。彼らは ICT 機器の活用に長けている反面、教育に関する経験が少ないため、学校でどのように活用すれば良いか戸惑う場面も少なくない。一方、教育経験豊富な先生が、苦手意識が強く、ICT 機器を効果的に活用し切れていない場面も見られている。一定の教育経験を積んだ先生が効果的に ICT 機器を活用し、先進的な教育活動を実践されている事例を多く集積し、それらを整理することで、ICT 機器の活用スキルや教育経験に関係なく、全ての先生方の教育活動の一助になることを目的として、研究を推進した。

3. 研究方法及び内容

- (1) 各校理事（本研究部を中心とした中学校理事）に、ICT 機器活用の事例紹介を募る。
- (2) 募った事例を紹介し、研究会で実践しながら情報共有を図る。また、情報共有には「Google Classroom」や「Google Jamboard」等を活用する。
- (3) 相模原市教育委員会教育センター学習情報班と連携し、情報共有を行うことで、研究を深化させる。
- (4) ICT における各校の課題や悩みを共有し、解決につなげる。
- (5) 実践例・紹介例等を整理してまとめ、研究紀要とする。

4. 研究経過

- | | |
|-----|---|
| 7月 | 研究計画立案 |
| 8月～ | 「Google Classroom」や「Google Jamboard」を活用し随時、研究を推進（各校の事例収集・情報共有）、学習情報班と連携 |
| 9月 | ミニ研修①【Google アプリ 「サイト」】 |
| 10月 | ミニ研修②【web アプリ「Kahoot!」】 |
| 12月 | 事例整理・報告作成 |
| 2月 | 反省・次年度に向けて |

5. 研究内容

(1) 教科指導に関する事例

①Google workspace の活用

- ・Forms による単元テストの実施【社会、理科】
- ・スライドによる生徒の意見書き込み、共有【特別の教科 道徳】
- ・Jamboard による生徒の意見書き込み、共有【社会、家庭科】
- ・Meet による濃厚接触者等自宅待機の生徒へのオンライン授業動画配信【全教科】
- ・サイトによる、各教科のプリント等管理【全教科】
- ・Forms (太字?) による、学級アンケート【学活】

15 平安時代の仏教に関わる組み合わせで、次のア～エから正しいものを1つ選びなさい。

ア 最澄・天台宗・金剛密寺

イ 最澄・真言宗・延暦寺

ウ 空海・真言宗・金剛密寺

エ 空海・天台宗・延暦寺

16 藤原氏は、天皇が幼少の時には①、成長してからは関白となって政治の実権を握った。①に入る言葉を書きなさい。(すべて漢字かすべてひらがなで)

記述式テキスト (短文回答)

創造、表現、器用さ 2班 知的、言語 集中、判断 運動する能力

折り紙	塗り絵	工作	つみき	たるまんがころんだ	鬼ごっこ	縄跳び	砂遊び
お絵描き	あやとり	トランプ	パズル	かくれんぼ	凧	鉄棒	跳び箱
けん玉	お手玉	おままごと		リレー	シーソー	竹馬	木登り
				トッシーボール	ボール遊び		

Forms の単元テスト

Jamboard の意見書き込み、共有

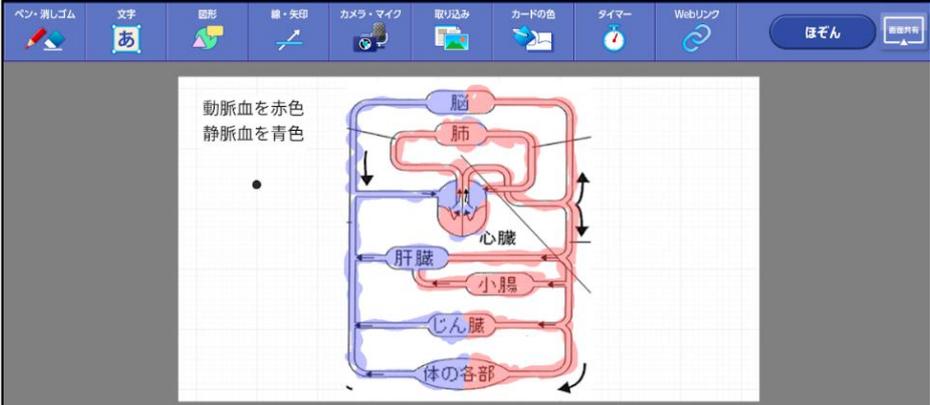
②アプリの活用

- ・「Maestro」による楽譜の作成と作曲した楽曲の再生【音楽】
- ・web アプリ「Kahoot!」による授業導入時の復習問題作成と実施【社会】
- ・web アプリ「電子回路シミュレーター」による回路の確認【理科】
- ・web アプリ「レゴEV3」によるプログラミング授業【技術】

③その他 Chromebook の活用

- ・実験の観察手順動画を作成し、説明を実施【理科】
- ・黒板アートの動画を撮影し、映像作品の作成【美術】
- ・歌のテストの生徒による動画撮影と提出【音楽】
- ・ダンスの動画撮影【保健体育】
- ・Chromebook による作品の撮影、課題提出【技術】
- ・オクリンクによる血液循環(動脈と静脈の流れ)の記入【理科】





実験動画

オクリンクによる記入

(2) 教科外指導に関する事例

①Google workspace の活用

- ・Forms による、図書室においてほしい本アンケートの実施【委員会活動】
- ・Forms による、昼食時に放送する曲のリクエスト実施【委員会活動】
- ・Meet による、昼食時の生徒会活動報告【生徒会活動】

②その他の Chromebook の活用

- ・ 3年生によるダンス動画撮影を、1・2年生が視聴【体育祭練習】

(3) 校務に関する事例

①Google workspace の活用

- ・ Forms による、個別面談の日程調整
- ・ Forms による、保護者の欠席連絡

②その他

- ・ 職員会議資料の pdf 化によるペーパーレス会議

(4) 成果と課題

成果としては、教科教育に限らず、また「Google workspace」に限らず、様々な分野において実践事例が集積できた。上記の通り整理したものを各校でさらに紹介し、ICTの活用を促進したい。教科教育の事例をとっても、理科で実践したものが他教科でも広く活用できるもの等があり、本紀要「考える目」がより多くの教職員の実践につながることを期待できる。

課題としては、いくつかの学校で「複数クラスで Chromebook を使用した授業を行うと回線がパンクする」「Chromebook が故障して授業で使用できないことが多く、紙ベースの資料等の準備も必要になり、授業準備が倍かかるようになった」「クロームキャストがなかなかつながらない」等、ハード面の課題が見られた。ハード面の充実はもちろん大切なことではあるが、ソフト面の工夫を引き続き研究し、ICT 機器の活用による教育活動の充実を図ることができるよう、本研究部の活動を引き続き推進していきたい。市内では、多くの教職員が ICT 機器を活用した教育活動の実践を行っている。それらを数多く集積・整理することにより、「人が財産（たから）」の相模原市の未来を担う生徒の育成につなげていきたい。

6. 来年度に向けて

前述のとおり、市内では、多くの教職員が多くの ICT 機器を活用した教育活動の実践を行っている。それらを引き続き集積・整理し広く情報共有することにより、更に充実した教育活動を実践していくことが大切であると考えます。

来年度は、神奈川県学校放送視聴覚教育研究協議会研究発表大会が相模原会場で開催される。上記実践を重ねていくことと並行して、大会発表が充実したものになるよう、研究を推進していきたい。

2. 事業部の実践

(1) 放送コンテスト

- 目的
- 校内放送の活性化を図り、創造性・主体性豊かな児童・生徒の育成を目指す。
 - 児童・生徒の情報活用力や表現力の育成を図る。
 - 教員の機器活用能力の向上を図る。

【小学校の部】

① 応募内容

1. アナウンス部門 学校生活の中から素材を求めた内容とする。内容は2分以内とする。
2. 朗読部門 次の指定作品を朗読する。作品のアレンジ・途中の省略は認めない。
《指定作品》『まいごのかぎ』（光村図書 国語 3年上）
3. 動画部門 今年度、校内放送用に作ったものに限る。内容は5分以内とする
学校や地域の特色が表れる内容にする。
4. ラジオ番組部門 学校生活から生まれたものでテーマは自由とする。内容は4分以内とする。

② 参加資格

- 市内小学校放送委員会に属する児童とする。

③ 審査及び表彰について

(株) エフエムさがみに審査を依頼し、同社より7名、本相視研より2名の審査委員により決定。
入賞校に賞状を贈る。作品制作に関わった児童には参加賞（賞状）を贈る。入賞校の作品は、春休みにエフエムさがみのラジオ番組内で紹介すると同時に、入賞児童の出演を予定している。

④ < 第20回放送コンテスト審査結果 > 合計31作品 参加校13校

	作品数	最優秀賞	優秀賞		FM HOT賞
アナウンス部門	4	星が丘小学校 あいさつの大切さ	南大野小学校 学校の魅力について		該当なし
朗読部門	12	桂北小学校	南大野小学校		星が丘小学校
動画部門	5	該当なし	南大野小学校	中野小学校	該当なし
ラジオ番組部門	10	該当なし	南大野小学校 長く働く先生クイズ	中野小学校 ハッピータイム	清新小学校 お昼の放送金曜日班

⑤ < 第20回放送コンテストを終えて... >

放送コンテストも今年度で、20回目を迎えた。これまで、株式会社エフエムさがみに協力をいただき、公正かつ、厳正な審査を行っていただいている。今年は教員および児童に配布されたクロームブックを活用した作品づくりや提出方法をとった。コロナ渦のなかでも、どの学校も工夫して作品作りを行っているところが大きな評価をいただいた。放送コンテストは作品づくりに関わる児童の創造性や主体性、表現力を高め、同時に教員の技能も高められる取り組みである。来年度からは、今年度の受賞した作品をグーグルドライブに保存し見ることができるようにする。それにより参加校・作品数が増え、作品の質が高まること、市内全体の小学校の校内放送が活性化することを目指したい。

【中学校の部】

相視研では夏開催のNHK杯全国中学校放送コンテストと秋開催の神奈川県中学校放送コンテスト（神放視協主催、NHK横浜後援）予選において、県学視連（学放視協）と合同で審査を行い上位大会への推薦作品を決定している。

夏のNHK杯全国大会（予選）へは相視研からアナウンス部門、朗読部門各6作品、ラジオ番組部門、テレビ番組部門各3作品ずつ推薦することができる。審査はCD（テレビ番組部門はDVD）で行うので収録は校内外で可能。全国大会決勝のみ審査の様子を観覧できる。

秋の県コンテストは対面で行い、アナウンス部門、朗読部門とも横浜・川崎以外の中学生を対象とした海老名予選を勝ち抜いた8校8人がNHK横浜放送局で開催される本選に出場する。

令和2年度より相視研理事が両大会の予選の事務局となり、年間を通して県内各地に要項配付、受付、会計、表彰準備、予選の運営、上位大会への申請などの諸業務を行っている。役員業務には相視研からも8人がコンテスト委員、実行委員として参加し、県予選、全国大会予選、全国大会決勝の審査や運営にあたっている。

今年度は、令和4年8月17日に第39回NHK杯全国中学校放送コンテストの決勝が、東京の千代田放送会館にて行われた。都道府県地区参加校数は544校、全国大会参加校数は287校であった。

アナウンス部門では、予選の地方大会を含め全国から788名、朗読部門では1410名の参加があった。ラジオ番組部門では121本、テレビ番組部門では102本の応募があった。相模原からは相陽中、旭中、弥栄中の5作品が2つの部門で全国大会へ推薦されたが、決勝進出は果たせなかった。全放連の一員として相視研から6人がコンテスト委員、実行委員として7月26日の地区（県学視連・相視研）大会（海老名市文化会館）、8月6日・7日の非公開の全国大会予選（東京渋谷NHK放送センター）、そして全国大会決勝の審査や運営にあたった。

また、10月16日に神奈川県中学校放送コンテスト県大会予選が海老名市文化会館で行われた。アナウンス部門では7校12人、朗読部門では12校15人が出場した。相模原からは相陽中、旭中、清新中、弥栄中の4校5人が出場し、朗読部門で弥栄中の生徒が優秀賞に選ばれた。11月3日、第42回神奈川県中学校放送コンテストがNHK横浜放送局にて行われた。相模原からは、アナウンス部門1人、朗読部門で予選を勝ち抜いた弥栄中、相陽中、旭中の3人が決勝大会に進出したが入賞は果たせなかった。決勝進出者はNHK横浜放送局のアナウンサーの方からもアドバイスを頂き、有意義な経験となった。今年度も参加生徒のレベルが高い決勝であった。予選、決勝とも相視研も理事と参加生徒引率顧問により受付、誘導、司会、審査、審査用紙回収などの役員業務を行った。

今後も相視研として両コンテストに積極的にとりくみ、日頃の校内放送で活躍している生徒に発表の機会を提供するとともに、他地区、他校との交流を通して、その資質・技術の向上を図っていきたい。あわせて、相模原の代表を1人でも多く上位大会に進出させ、高校放送コンテストをへて各方面で活躍する人材を育成したい。NHK杯は県学視連側は放送部設置校を中心にアナ21作品、朗読47作品、ラジオ4作品と激戦となっているのに対し、相視研側は応募にゆとりがある。そのためにも小学校放送コンテスト経験者への声かけ等を通して参加校の拡大と、応募のなかったテレビ番組部門への進出を期待したい。

(参考)

2022年度第39回NHK杯全国中学校放送コンテスト 各部門の課題

(1) アナウンス部門

中学校生活の中から素材を求めた内容。原稿は生徒の自作とし、校内ニュースやニュース解説など、自校の校内放送用のもの。本文は20字×20行以内。

(2) 朗読部門

次の指定作品のうち、1編をえらび、自分の表現したい部分を決め朗読する。県名、名前、作者名、作品名を含めて2分以内。

『新編銀河鉄道の夜』宮沢賢治（新潮文庫）

『翔ぶ少女』原田マハ（ポプラ文庫）

『雨降る森の犬』馳星周（集英社文庫）

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』ブレイディみかこ（新潮文庫）

『キッチン』吉本ばなな（新潮文庫）

『オー・ヘンリー傑作選』大津栄一郎訳（岩波文庫）

(3) ラジオ番組部門

中学校生活から生まれたもので、テーマは自由。クレジットコールを含めて5分以上7分以内。

(4) テレビ番組部門

中学校生活から生まれたもので、テーマは自由。5分以上8分以内。

2022年度第42回神奈川県中学校放送コンテスト 各部門の課題

※1部門につき各校2名参加できる。各部門上位8校が代表として県大会に出場する。

(同じ学校から上位に2名入った場合、規定により1名のみ県大会に推薦し、次点の学校を県大会に推薦する)

(1) アナウンス部門

学校のニュースや活動に関する呼びかけなど中学校生活の中から生まれた素材で、自校の校内放送に使用できるもの。400字詰め原稿用紙1枚以内。

(2) 朗読部門

指定作品の表現したい部分を任意に選択し、2分以内で朗読する。

○令和4年度指定作品

『蜘蛛の糸・杜子春』芥川龍之介（新潮文庫）

『ミラクル』辻仁成（新潮文庫）

(2) 広報

1. 目的 機関誌 研究紀要「考える目」を発行することにより、本研究会の研究概要を多くの教職員・他機関に広く知らせ、視聴覚教育の推進と意識の高揚を図る。
2. 発行日 研究紀要「考える目」 令和5年3月発行
3. 配付対象 研究紀要「考える目」PDFにて作成 相視研理事
4. 内容 研究紀要「考える目」
 - ・本研究会の研究内容の紹介
 - ・各種研究大会 発表報告 等
 - ・研究部、事業部などの研究、活動内容の報告
5. 確認事項 研究紀要「考える目」年1回発行
締め切りは2月上旬。

(3) ホームページ

1. 目的

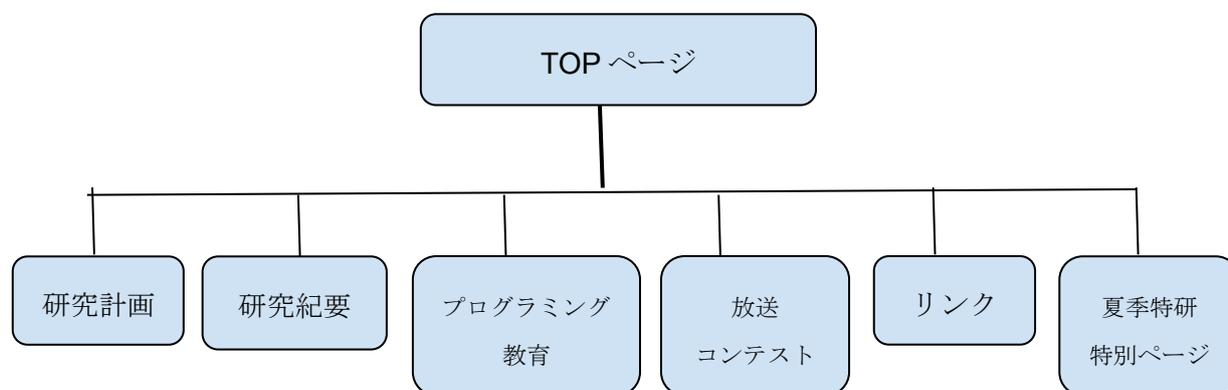
本研究会の研究概要を多くの教職員に広く知らせ、視聴覚教育の推進と意識の高揚を図る。

2. 管理

内容の是非や著作権・個人情報に関わる許諾についての判断は会長が行う。ただし、ホームページのデータは総合学習センターのサーバー上で管理されているため、システム上の管理者は総合学習センター所長となる。定期的なホームページの更新を行う。

(URL:<http://www.sagamihara-kng.ed.jp/soushiken/>)

3. 内容 (サイトマップ)



※夏季特研特別ページは令和4年度のみ

4. 今年度の活動

夏季特研がオンライン開催されることになり、ホームページ上に特設ページを新設した。また研究紀要や研究計画の最新の内容を更新した。

5. 今後の予定

来年度以降、市の校務系ネットワークが統合されるのに伴い、ホームページシステムの移行が必要となることが予想される。従来のFTPを用いたホームページ更新からクラウドでの更新が行えるようになるため、その準備を行う必要がある。

具体的には、現ホームページの内容の確認と取捨選択、また各種データの移行や新ホームページのレイアウト検討、データ格納、整備などである。

本ホームページは市内の教職員を主な対象として作成をしており、相視研の研究内容を広く伝えることを目的としている。ICTを活用した授業経営、プログラミング教育や校務の情報化などが著しく進む昨今の学校現場にとっての良い情報源となるように、整備・拡充を続けていきたい。

Ⅲ 今後の課題

令和3年1月、中央教育審議会は「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～」を答申した。新しい時代の学校教育の在り方について基本的な方向性を示している。

答申では、これまでの日本型学校教育の良さを生かしながら、これからの学校教育の在り方を提言している。「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿である。

子どもたち1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークで教育のICT環境を整備するGIGAスクール構想は、「令和の日本型学校教育」をすすめる上で必要不可欠であり、整備されて今年で三年になる。学校における学びの風景は一変した。一方で、端末の活用方法等に悩みを抱える先生方も多数いることであろう。1人1台端末をどのように活用していけばいいのか、情報モラルをどのように子どもと考えていけばいいのか、プログラミング教育はどのように行えばいいのか。その不安の声に対して、適切な情報を発信していくことも、今後の課題となるであろう。

また、ICT機器を当初あったような「とにかく使う」のではなく、「どのような使い方をするのか」が問われるようになった。これからの数年で有効な利活用の事例が集まってくるとともに、有効でない使い方は淘汰されていくだろう。研究部では、日々変わりゆくICT機器の環境についてお互いの学校の状況を情報交換しながら、よりよい実践を行うべく研究を深めることができた。その成果については、各研究部のまとめを参照してもらいたい。

相視研では、様々な世代の視聴覚・情報主任の先生方に参加していただいている。幅広い知識を研究部の場で提供していただき、それが良い研究につながっている。年々変化するICT環境に対応し、児童・生徒がこれからの時代を築く資質・能力を育めるように教育実践を積み重ね、研究を進めていく必要があるだろう。

あとがき

相模原市立小中学校視聴覚研究会

副会長 浅倉 勲

児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした、

視聴覚・情報教育はどうあるべきか

本研究会はこのテーマを継続的に掲げ、4研究部会6グループに分かれて研究を深めてきました。それぞれの研究には特色があり、実践を通して精力的に取り組んできました。

そして、ここに今年度の研究成果をまとめることができました。

教育メディアを利用した視聴覚教育の推進と、国のGIGAスクール構想によるタブレットPCの活用等、情報教育に研究の幅を広げ取り組んできたことがわかります。一年間の研究成果のすべてを掲載することはできなかったと思いますが、多くの方にご覧いただき、今後の教育実践に活かしていただければ幸いです。

「私たちには1日に3万5千回のチャンスがあります。」さて、何の話でしょう。ケンブリッジ大学のバーバラ・サハキアン教授の研究によると、私たちは1日に最大3万5千回の決断をしているそうです。それには食事での「どれから食べようか」という些細なことから、「将来に向けた進路を決める」といった人生を左右する決断、もちろん学習中の思考・判断も含まれます。そして、適正な判断材料や根拠となる情報を得て、それらに基づいたベストな判断や、実行する力が必要となってきます。このようなことから、視聴覚教育や情報教育が担うべき重要性がわかります。

本研究会は、未来の担い手である本市の児童・生徒のよりよい成長と、心豊かに指導することのできる教員の育成をめざし、これからも研究を続けます。

最後になりましたが、相模原の視聴覚教育・情報教育の発展のために、指導・助言くださいました教育委員会指導主事の皆様、そして本研究に関わるすべての方に深く感謝申し上げます。